Spiritualism News Letter
スピリチュアリズム・ニューズレター
2001 第15号 10月1日発行

発　行／スピリチュアリズム・サークル　心の道場
発行人／小池里予
〒441-3147愛知県豊橋市大岩町字火打坂18
TEL 0532-41-0537　FAX 0532-41-8257
ホームページアドレス　http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/

今号の内容

・スピリチュアリズムから見た地上の政治・経済
地上の政治・経済の土台となっている物質中心主義と利己主義……1
スピリチュアリズムから見た民主主義と財政の問題点……10
スピリチュアリズムこそ地上世界変革の担い手
――変革の主役は政治ではなく“スピリチュアリズム”……23

# スピリチュアリズムから見た地上の政治・経済

小泉政権の誕生は、日本国民に政治を身近なものにし、政治への大きな関心を引き起こしました。では、スピリチュアリストである私達は、政治とどのように係わりを持ったらよいのでしょうか。

スピリチュアリストは、政治に無関心であってよいのか？　スピリチュアリストも国民の責任・義務として、何らかの政治参加をしなければならないのか？　選挙の投票を棄権するのは、間違ったことなのか？　もし選挙に行くとするなら、どのような政治家・政党に投票したらよいのか？

これまで皆さんは、こうしたことで迷われたことはなかったでしょうか。今回は、スピリチュアリズムの観点から、地上の政治と経済について考えてみることにしましょう。

## 地上の政治・経済の土台となっている物質中心主義と利己主義

### 1　「物質中心主義」と「利己主義」に覆われた地上世界――地球は、きわめて霊的に未熟な惑星

**地上世界を論じる際の基本認識**

私達スピリチュアリストが、まず押さえておかなければならないことは、現在の地球上の問題の大半が、究極的には「物質中心主義（マテアリズム）」と「利己主義」に起因しているということです。現在の地球は、物質的満足・本能的快楽を真っ先に求めようとする「物質偏重主義」と、そこから派生する自分だけの利益・幸せを優先する「エゴイズム（利己主義）」に支配されています。地球は、きわめて霊的に未熟な惑星であるということです。

先月、世界中を震撼（しんかん）させたアメリカの同時テロ事件も、根本的には、地上人類の霊的未熟さから引き

起こされたものなのです。

これは地上世界の問題を論じるときに、常に頭にとどめておかなければならない最も重要な霊的視点です。もし、この重要な視点を忘れたところで地上世界を論じるならば、すべてが的外れなものとなります。

地上世界が、物質主義と利己主義に覆いつくされた非常に醜い世界であるということは、その中にどっぷり浸かり、それ以外の世界を知らない地上人にとっては、なかなか実感しがたいことです。しかし霊界という別の素晴らしい世界と比較するとき、地上世界における一番の問題点が浮き彫りにされるのです。霊界の人々は異口同音に、地上は物質主義と利己主義に覆われた暗黒の世界であると述べています。

ここでもう一度、シルバーバーチの言葉を振り返り、地上世界を論じる際の基本を確認してみることにしましょう。

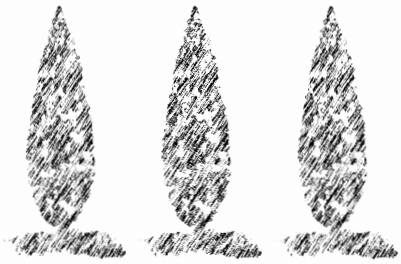
> 問題のそもそもの根源は、人間が霊的法則によって支配されずに、明日への不安と貪欲、妬みと利己主義と権勢欲によって支配されていることにあります。残念ながらお互いに助け合い協調と平和の中に暮らしたいという願望は見られず、我が国家を他国より優位に立たせ、他の階層の者を犠牲にしてでも我が階層を豊かにしようとする願望が支配しています。すべての制度が相も変わらず唯物主義の哲学を土台としております。唯物主義という言葉は今日ではかなり影をひそめてきているかも知れませんが、実質的には同じです。誰が何と言おうと、この世はやはりカネと地位と人種が物を言うのだと考えています。そしてそれを土台として、すべての制度をこしらえようとします。
>
> 〈シルバーバーチ６・８１〉

## お金こそが幸せの源泉と考える現代人
## ――“拝金主義”を当たり前とする現代人

シルバーバーチの指摘のように、地球上に住む大半の人々は、物質的な豊かさこそが幸福の源であると思っています。そして地上人生を、その追求のために費やしています。人々は、お金があれば幸福を手にすることができ、お金がなければ幸福は得られないものと思っています。現代人にとっては、お金こそが最も頼り甲斐のあるものであり、神のような存在となっています。

これまで宗教は心の大切さを説き、物質欲の虜になることを厳しく戒めてきました。現在でも多くの人々は何らかの宗教に籍を置いてはいますが、彼らの大半は、心より物質を優先した生き方をしています。時には心の大切さを強調する人もいますが、そのような人であっても、いざ自分の所有している物質的財産を犠牲にするとなると、とたんに本性を剥き出しにして抵抗します。お金よりもっと大切なものがあると口で言う人は多いのですが、それを本当に実生活で実行している人は、現実にはきわめて稀なのです。

もし、そうした人がいるなら、その人は現在の地上世界においては聖人と言われることになるでしょう。あるいは世間知らずの変人・奇人と見なされるかも知れません。金持ちでありながら、質素な生活を送っている人、貧しい人々のために気前よく自分の全財産を犠牲にしようとする人はめったにいません。結局、恵まれない人々への奉仕は、自分の財産や家族を守った上で、片手間にすべきものとなっています。



## 経済的な豊かさにともなう肉主霊従と霊的退廃

物質中心主義と利己主義は、地上人の心を深く支配しています。それは経済的な豊かさを手に入れるにともない、さらに強く人々を支配するようになり、表面化し露骨な形を取るようになります。工業化に成功し先進国の仲間入りをした国々では、それまでの宗教的伝統は内部から骨抜きにされ、あっと言う間に崩れ去ります。それに代わって、物質欲追求の風潮が国中に蔓延するようになります。

肉体を持ちながら、物質欲の誘惑を退け、心を優先し続けるのは並大抵のことではありません。自らの意志によって「霊主肉従」の状態を維持することができる地上人は、めったにいません。近代以前までの人類は、物質的に恵まれなかったために、何とか霊主肉従の最低ラインの状態を保ち、心の荒廃に歯止めをかけてきました。しかし近世以降、物質的に豊かな時代を迎え、自由に物質欲を追求することができるようになると、未熟な霊性から生じる動物的本能が剥き出しにされるようになってきました。

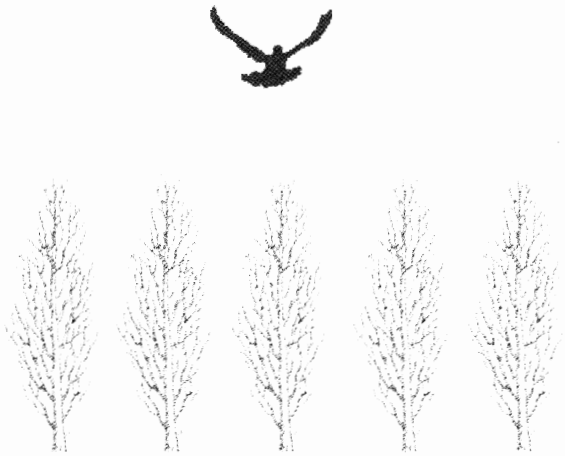
今後、地球では、これまで以上の早いスピードで経済発展がなされていくことになります。それによって地球は物質文明をさらに推し進めることになりますが、精神的・霊的には、いっそうの荒廃が現出することになります。今まで厳格な戒律によって信仰生活を維持してきたイスラム教徒も、国家の経済発展につれ、内部から崩れ始めるようになるでしょう。霊性の未熟な地球人においては、物質的な力は、宗教も及ばないほどの強い支配力・影響力を持っているのです。

## 経済グローバル化という極端なエゴイズム

最近では、経済のグローバル化が叫ばれるようになっています。経済のグローバル化という言葉は、実に響きのよいものです。しかしその実態は、現在すでに物質的な力を持っている欧米諸国が、自由競争を進めるための都合のいい口実にすぎません。それは完全な自由競争の世界を目指そうというもので、地球規模での実力主義の拡大を意味しています。つまり大が小を食う“弱肉強食”の卑劣な競争原理を正当化するものなのです。そこでは結局、小は大に太刀打ちできず食われてしまうことになります。

完全な自由競争などというきれいごとの本音は、単なる強者サイドのエゴイズムの論理です。それによって利益を得るのは、現在すでに力を持っている国だけなのです。なかでも唯一の超大国であるアメリカが、最大の利益を手にすることになるのです。歯止めも規制もない物質欲追求が、地球規模で展開することで、地上世界はいっそうエゴ的競争に巻き込まれることになります。貧困国家はいつまでも貧しいまま取り残され、金持ち国家にはさらに多くの富が集まるようになり、経済格差が一段と激しくなります。

この経済グローバル化の中で、最も悪質で極端なエゴ的性格を持っているのが、最近アメリカを中心として出現し、東南アジア各国（タイ・インドネシア・マレーシアなど）の通貨危機を引き起こした「ヘッジファンド」の存在です。ヘッジファンドとは、他国の通貨を商品として売買し、時には悪質な操作をして、金儲けをたくらむ気違いじみた投機家（ギャンブラー）達のことです。彼らは、他国の通貨を自分のギャンブルの対象として物のように売買し、世界の為替市場を混乱させています。他国の人々がどれほど困ろうがおかまいなく、ただ自分が儲かることだけ、金が殖えることだけを考えているのです。カジノでギャンブルをする感覚で、他国の通貨を弄（もてあそ）んでいるのです。自分が行うギャンブルの陰で、多くの人々が苦しんでいる姿は全く目に入っていません。



## 2　金の力に狂わされた日本民族
## ――“バブル経済”という悪夢

１９８０年代に始まったバブル景気は、１９９０年に崩壊し、その後遺症は１０年後の今日まで尾を引いています。バブル景気の崩壊による痛手で、日本経済は不況にあえいでいます。バブルとは“泡”という意味の英語で、“バブル景気”とは実態のともなわない景気、嘘の好景気ということです。

１９８０年代、日本では国際情勢の中で、低金利政策が施行されました。その低金利政策によって、銀行が企業などに貸し出す金利が大幅に引き下げられたため、資金が借りやすくなりました。そして大金を借りた企業が、金儲けに走ることになりました。金儲け（投資）の対象となったのが、土地と株でした。

皆が先を争って土地を買い占めたため、地価がどんどん上昇しました。そして地価の上がった土地を担保にしてさらに銀行から資金を引き出し、投機目当ての土地の買い占めが続けられました。それによって土地の値段はさらに上昇しました。こうして「土地の価格は絶対に下がることはない」という錯覚（土地神話）が人々の中に生まれ、これがなおいっそう地価を高騰させることになりました。

一方、銀行から借りたお金で、株買いに走った企業もあります。また土地で儲かったお金も、株に向けられました。その結果、株の値段が急上昇することになりました。（＊ピーク時には平均株価は４万円近くにまで上昇しましたが、現在は１万円を割るようになっています。これからもっと下がって８千円を下回るようになるのではないかと予想する専門家もいます。）

バブル経済のもとでは、手に入れた土地や株の値段が急激に上がったため、人々は金持ちになったような気分になり、高級乗用車やリゾートマンション・高級住宅・ゴルフ会員権などに飛びつきました。こうして日本中に異常な消費ブームが巻き起こったのです。危機感を抱いた日銀は、バブル景気の抑制に乗り出し、金利を上げて銀行からお金を借りにくくしました。これによって土地を買うための資金が途絶え、地価は急激に下がり始めました。そして土地で損をした人々が株を売りに出したため、株価が暴落することになりました。このようにしてバブル景気が弾けたのです。土地と株に踊らされた企業や不動産業者・一般の人々は、大損失を被（こうむ）り、どん底で苦しむことになりました。同時に気軽に金を貸し付けた銀行も、不良債権（＊銀行が貸したのに返してもらえないお金のこと）を抱えて、苦境に立たされることになりました。

バブル景気が日本経済に残した傷痕は、単に経済の不況ということだけにとどまりません。金、金と踊らされたことで、日本民族が保ってきた精神性が根底から崩されることになったのです。バブル景気の中で、それまで律義に物づくりに精を出し、世界的にも誇る堅実な歩みをしてきた製造業までもが、土地や株を買い漁るようになり、マネーゲームに手を染めるようになっていきました。

土地や株によって大金が生み出されることを知ると、汗水たらしてまじめに物などつくっていることがバカバカしくなってきます。本業以外のマネーゲームで、こんなにも簡単に金が稼げると錯覚した製造業は、堅実さ・誠実さという精神的な伝統を捨て去ることになってしまいました。こうして製造業中心の日本の産業構造が、急激に変化することになりました。企業がこぞってマネーゲームという悪夢にとりつかれ、土地と株というバクチにのめり込み、金の盲者になってしまいました。マネーゲームというバクチに翻弄された企業は、５～６年のバラ色の日々を楽しんだ後、バブル崩壊とともに、奈落の底にたたき落とされることになったのです。

## 3　取るに足りない地上の政治

### 地上の政治に重要性を認めない霊界人
### ――どちらでもいい地上の政治

霊界の高級霊は、地上の政治を重要なものとは考えていません。政治的な主義・主張の違いや、政党の違いなどは全く取るに足りないものとしています。霊界の人々にとっては、地上の政治は、しょせん霊性の未熟な世界での、きわめて幼稚で不完全な人間の営みにすぎません。物欲と物質中心主義の上に立った、エゴ的活動の一側面にすぎません。それは、狂った「物質偏重主義」のもとで踊らされている人間の営みの一つでしかないのです。

私達地上人は、物質的視点しか持ち得ないために、物事の本質を正確に理解することができません。そのためにどちらでもいいことを必要以上に大袈裟に考えたり、さも重要なことであるかのように思ってしまいます。そして政党の主義・主張が、国民生活に重大な影響をもたらし、国の方向を大きく左右するかのように考えてしまいます。

しかし霊界の視点に立ってみると、そうした地上世界の政治的な主義・主張などは、大したことではありません。全く問題にもならないことなのです。民主主義と共産主義といったイデオロギーの違い、自民党や民社党・公明党といった政党の区別なども無きに等しいものなのです。どんな人間がアメリカの大統領や日本の首相になろうが、またどの政党が政権を握ることになろうが、霊界の観点からは、どちらでもいいことなのです。

霊界の人々は、政治によって、地上世界が決定的に向上していくようになるとは考えていません。政治による変革は、せいぜい人間社会の表面的な部分を少し変える程度のものなのです。地上の政治は、高級霊にとっては、肉主霊従（物質主義・利己主義）に支配された地上人の低次元の営みに他なりません。地上のもろもろの政治問題は、「霊的進化」という人類にとって最も根本的・本質的な問題とは、およそ係わりのない事柄ばかりなのです。

私達地上人の視野からは、地上世界を大きく揺り動かすように思える政治的事件も（＊今回の、アメリカでのテロ事件も含めて）、何百年という長いスパンから見ると、実にささいな出来事であることが多いのです。現在、地球上を騒がせている出来事のほとんどが、数百年後にはすっかり忘れ去られることになるでしょう。永く語り継がれるのは、ほんのわずかな事柄にすぎないはずです。地上の政治的な事件は、霊的視点から見たとき、人類の進化の歩みの中のごくごく小さな部分でしかないのです。

### 共産主義の脅威さえも問題視していなかったシルバーバーチ

一般に宗教に係わる人々は、共産主義を毛嫌いするのが普通です。キリスト教では、共産主義を神に敵対する勢力・サタンの支配する帝国と考えてきました。共産主義下の諸国では、かつてのローマ帝国時代と同じように、徹底した宗教弾圧と迫害が行われてきました。共産主義（マルクス・レーニン主義）は、弁証法的唯物論を思想の支柱とし、宗教（＊特にキリスト教やイスラム教）をアヘンと同様の価値なきものと見なし、神の存在を否定しています。こうした点からすると、共産主義はスピリチュアリズムにとっても、大きな敵であることは間違いありません。

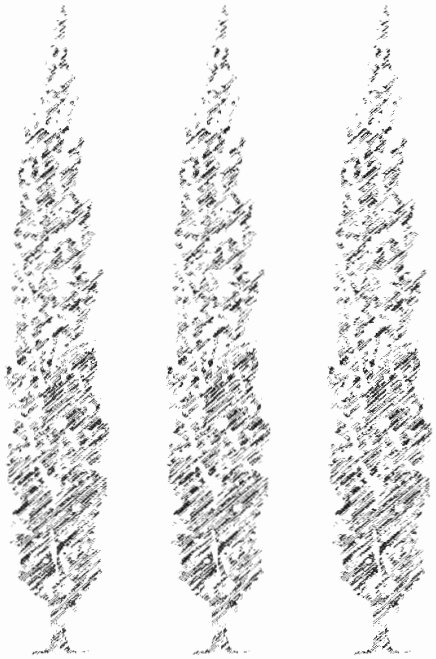
１９６０年代といえば冷戦の真っ最中で、ソビエト連邦が強大な力を誇り、世界の３分の１を支配していました。自由主義陣営の国々は、ソ連の世界赤化の野望に、恐れおののいていました。米ソによる核兵器競争がエスカレートし、やがて第３次世界大戦が勃発し、世界中が核戦争に巻き込まれるのではないかとの不安が国々を覆っていました。当時は日本でも左翼勢力が力を伸ばし、共産革命が起こって、やがてソ連か中共の支配下に入るような事態が生じるのではないかと危機感を募らせていた人々も多くいました。

そうした時代に、シルバーバーチに対して、“共産主義”について次のような質問がなされています――「（共産主義は）既成宗教のいずれよりもはるかに頑強で、その影響力は強烈です。これこそ純粋な唯物観を説いている点で、われわれの本当の敵ではないかと思うのですが……」　（シルバーバーチ１１・１７８）

この質問について、シルバーバーチは、地上社会の問題の根源は「物質偏重主義」にあること、それに対し、イエスをリーダーとするスピリチュアリズムが真っ向から戦いを挑んでいることを述べています。そしてスピリチュアリストは、明日のことを思い煩うことなく、最善を尽くして霊達に協力していればよいこと、そうすれば地上の問題は徐々に取り除かれていくようになることを教えています。

シルバーバーチや高級霊達から見れば、地上での民主主義・共産主義といった区別は、しょせん政治上の立場の違いにすぎません。シルバーバーチは、地上世界の最も根源的問題は、そうした政治的イデオロギーの差にあるのではなく、「物質主義」と「利己主義」というより内面的な問題にあることを明言しているのです。人類共通の“エゴイズム”という本質的問題の前には、自由・共産などという政治的イデオロギーは取るに足りないと言っているのです。シルバーバーチの、これほどまでの超然とした見解を聞くにつけ、霊界の視点とはまさにこういうものかと驚かされます。

シルバーバーチの答えを聞いた当時のサークル参加者の大半は、その真意を理解することができず、一抹の不安を感じていたに違いありません。なぜなら当時の共産主義勢力の勢いはあまりにも大きく、とても楽観視できるような状態ではなかったからです。シルバーバーチの答えは、到底、現実的なものとは考えられなかったことでしょう。しかし、それから３０年後、ソ連の崩壊によって共産主義の脅威は消え去り、シルバーバーチの言葉は現実のものとなりました。当時は、ソ連が将来そのような形で終焉を迎えるようになるとは、誰一人予想さえできないことでした。



＊現在、地上人類が抱いている脅威は、環境問題や新たな核開発に向けられています。しかしシルバーバーチは、これらの問題についても楽観的な見解を示しています。人類は将来、滅んでしまうことになるのではないかとの不安に対して、その心配はないこと、楽観的に考えるべきであることを述べています。当然、今回のアメリカでのテロ事件についても、大袈裟に考える必要はありません。（シルバーバーチ８・３４、３５頁、１１・３２、５９頁）

＊ソ連崩壊は、米ソの軍拡競争が、ソ連側に経済的な破綻を引き起こしたことに最大の原因があります。米ソの経済力の差が、軍拡競争を決着させ、ソ連崩壊を招くことになったのです。ゴルバチョフという一人の偉大な政治家の決断がソ連崩壊の引き金を引くことになったのは事実ですが、本質的な原因は、どこまでもソ連自体の経済的破綻にあるということなのです。

こうした地上の状況については、霊界サイドは完璧に知っていたはずです。そして間もなくソ連が崩壊することも、分かっていたものと思われます。

＊日本の外交について

最近、日本の政治で問題となった首相の靖国神社参拝問題も、スピリチュアリズムの観点から見ればどちらでもいいことです。霊界や霊魂に対する明確な死生観のないところでの議論が繰り返されているだけであり、どこまでいっても平行線をたどることは明らかです。

ただ地上的な視点から見れば、８月１５日に参拝するとの公約を首相みずから翻（ひるがえ）した今回の出来事は、日本外交のまずさを内外に示すことになりました。他国（中韓）からの圧力に対する弱腰、首相自身の外交的ポリシーの乏しさ、首相・外相をはじめとする国家のリーダー達の外交音痴という、決定的な弱点をさらけ出すことになりました。靖国問題は、首相が公約を覆して日程を変更したということよりも、日本の外交的欠陥を改めて認識させたという点において問題を残したのです。

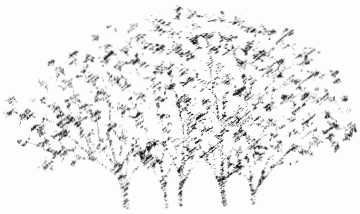
現実の地上世界における国際関係は、国益追求を第一としています。まさに国と国とが利己的関係にあるということです。こうした「利己的国家関係（エゴ的国家関係）」とは、端的に言えば弱肉強食の競争関係、たえずケンカをしているような状況にあるということです。そうした現実の国際関係の中で、日本がどのような外交スタンスを取るかということが問題とされるのです。

これまで日本政府は、ケンカの場に立たされながら、当たり前の自己主張もせず、最低の正当防衛の努力さえも真剣に行ってきませんでした。それどころか、ケンカを売ってくる外敵と、ひたすら仲良くしようとしてきました。「戦争がいいか平和がいいか、ケンカがいいか仲良しがいいか？」と問われれば、誰でも「平和で仲良しがいい」と言うに決まっています。しかし、すでにケンカに巻き込まれた中で、一人だけ争いを避け、周りと仲良くしようとすることは、現実には不可能なことなのです。本気で仲良くしようという気持ちがない相手と、真の友好関係を築くことなどできません。それは単なる理想論にすぎないのです。

弱肉強食が当たり前となっている未熟な惑星地球にあっては、自己防衛という現実的な路線を取るのか、自国が滅ぶことを承知で友好という理想を優先するのか、という選択に迫られるのです。「霊的真理」が共通の理念となっていない現状では、二つの未熟な方法のうち、より良い道を選択しなければならないのです。

これまでの日本外交は、世界の中で珍しいほど理想路線に偏ってきました。日本外交は幼稚であると、たびたび言われてきました。利益を奪い合う競争世界においては、常識的ともいうべき国益保護・正当防衛・自己主張の要素が、あまりにも軽んじられてきました。そのために外国からなめられ、いいように利用されてきたのです。

今回のテロ事件は、日本外交の本質的問題を浮き彫りにすることになりました。もしテロをちらつかせて脅迫されたとき、日本国家がどのような対応をするかを、否応なく考えさせられたのです。



## 4 政治より個人の霊的成長の方が重要 ── 大切なのは政治ではなく、個人の生き方

### ラベル・党派は全く無意味

シルバーバーチは、地上世界での政治的主義・主張に対して、全く関心がないと繰り返し述べています。

> 私は、ラベルや党派には関心はありません。私が関心をもっているのは“真理”だけです。
>
> 〈シルバーバーチ７・６４〉

> 私はラベルというものには全く関心がありません。私にとっては何の意味もありません。地上世界ではラベルが大切にされます ── 共産主義者・社会主義者・保守党・労働党・スピリチュアリスト・セオソフィスト・オカリスト等々、挙げていったらキリがありません。しかし大切なのはラベルではなく、その中身です。
>
> 〈シルバーバーチ１１・１８０〉

### 「霊性進化」が唯一の判断基準

こうした意見の背景には、霊界人の明確な価値観があります。霊界の高級霊達は、私達地上人をどのような観点から判断しているのでしょうか。どのような基準をもって、地上人を評価しているのでしょうか。結論を言えば、霊界の人々は「霊性の進化」という一点において判断しているということです。一人一人の地上人を、霊的人格性という物差しで評価しているのです。霊界では一切の地上的肩書やポジションは通用しません。その人の「霊格」があらわにされ、何一つごまかすことはできません。その霊がどの程度の進化のレベルにあるかが、誰の目にも明らかなのです。

霊界の人々は、私達地上人をそれと全く同じ観点から見ているのです。言うまでもなく霊界からは、地上人の霊的進歩のレベルは“オーラ”によって正確に知られるようになっています。「霊的成長度・霊性進化のレベル」こそが、霊界の人々の評価の基準なのです。

### 利他的実践・無私の奉仕こそが、最高に価値あるもの

霊的成長は、純粋な利他的実践によってなされます。無私の奉仕という霊的実践によってなされます。そこでシルバーバーチをはじめ霊界の人々は、地上人の ──「霊的摂理にそった生き方をしているか」「純粋な奉仕を実践しているか」という点に、関心を向けているのです。地上人の目からは、どれほど素晴らしいと思える行為や政治改革なども、人類の霊性進化に寄与するものでないかぎり、価値は認められません。

霊界の人々の視点は、常に地上的利害関係を一切超越した、「霊的成長」という一点だけに向けられているのです。

> 私はどの主義にも属しません。私にはラベルはありません。名目に惑わされてはいけません。その目的としているものは何か、何を望んでいるのか、そこが大切です。なぜなら、敵と味方の双方に誠実で善意の人がいるからです。
> （中略）
> つまり霊的真理を知ることによって覚悟を決め、物的生活のあらゆる事柄に奉仕と無私の精神で臨めるようになれば、地上に平和と和合が招来されます。それは主義・主張からは生まれません。
>
> 〈シルバーバーチ１１・１８９〉

私たちは人間がとかく付けたがるラベルにはこだわりません。政党というものにも関与しません。私たちが関心を向けるのは、どうすれば人類にとってためになるかということです。

〈シルバーバーチ５・２３２〉

**共産主義者の中にも、霊性の高い人はいる**

そうした霊界人の見方からすれば、唯物論者の代表である“共産主義者”の中にも霊性の高い人はいるということになります。主義・主張は何であれ、人類のためを思い、純粋な利他愛の実践に全身全霊で打ち込んでいる人は、最も価値ある生き方をしていることになります。信じている主義それ自体は間違っていても、個人的な心の動機によって、善し悪しが決まるのです。その人の動機が純粋で、人類の霊性進化に貢献する歩みとなっているならば、どのような組織に属していても、霊界人の認めるところとなるのです。

それは逆に言えば、たとえスピリチュアリストであっても、自分のためだけに生きているならば、唯物論者よりも霊的に劣ることがあるということです。スピリチュアリストであっても、一切のごまかしはききません。今この時も、純粋に心の底から、人類のために貢献したいと思っているかどうかが、霊界の人々によってチェックされているのです。

そのための道具となる人であれば、いかなる党派の人であっても、いかなる宗派の人であっても、いかなる信仰をもった人であっても、時と場所を選ばず働きかけて、改革なり改善なり・改良なり、一語にして言えば奉仕のために活用します。

〈シルバーバーチ５・２３２〉

# スピリチュアリズムから見た民主主義と財政の問題点

## 1　果たして民主主義は絶対善なのか？

### 現代の「民主主義信仰」

現代世界では、民主主義は最も優れた政治システムであると考えられています。大半の人々は、政治といえば無条件に民主主義のことであると思っています。民主主義は、独裁者の専制による悲劇を防ぎ、国民一人一人の権利を尊重し、より多くの人々に幸福をもたらす政治制度と思われています。２０世紀になって、民主主義は世界中に広まり、世界共通の「普遍的真理・絶対善」であるかのようになっています。現代では、民主主義を唱えることは無条件に善であり、民主主義に少しでも反するようなことは悪であるとの認識が定着しています。

現代の政治家は、民主主義という言葉に、常に最も神経を配っていなければなりません。それと同時に、たえず自らが民主主義の擁護者であることを国民に強調し続けなければなりません。また時には自分の政敵に対して、反民主主義・独裁者のレッテルをはって追い落としを謀ることになります。民主主義を声高に叫び、自らを民主主義者であるとアピールすることは現代政治における常套手段なのです。選挙に勝てば、自らを民主主義の勝利と宣言し、選挙に負けた政敵を独裁主義の敗北とする光景をよく目にします。このように現代の地球上では、「民主主義信仰」と言ってもよいような状況が見られます。

しかし果たして民主主義は、人々が考えるような絶対的な善というべきものなのでしょうか。スピリチュアリストである私達も、民主主義を無条件に信頼してよいのでしょうか。

### 民主主義は本当に平等なシステムか？

民主主義とは端的に言えば、数の論理によって政策を決定する政治システムということです。民意は数の多さによって示されるとされ、「多数決」は民主主義の重要な原理となっています。理念上は、少数意見を尊重し、決定を下す前には自由な討議を尽くすことが大切とされています。

しかし現実には、意見の違う者達がどれほど審議を続けても、一致点を見い出したり、歩み寄ることはできません。両者が初めから共通的な立場、あるいは共通の基本的見解を持っているときのみ、歩み寄りが成立するのです。もし議案が民族の利害に大きく係わったり、政党の大義名分に抵触するようなときには、歩み寄りとか妥協点を見い出すというようなことは、ほとんど不可能と言わなければなりません。結局、民主主義の多数決の原理とは、数の論理による強制手段を正当化する方法に他ならないということになります。

多数の意見は民意を代表しているという考え方は、時に大きな矛盾を引き起こします。例えばある政権の支持率が５１％というようなケースでは、残りのおよそ半分の国民の意見は民意とは見なされなくなります。国民の意見を最大限に尊重するという民主主義の基本的理念は、大きく揺らぐことになります。ここには“平等主義”を大原則とする民主主義の、宿命的な欠陥が現れています。

さらに次のようなことを考えてみると、民主主義は必ずしも平等な制度でないことが明らかになります。現代政治において選挙は、国民が平等に政治に参加する機会ということになっています。しかし考えてみれば、政治について全く無関心で知識のない人と、その道の専門家である政治学者が、同じ一票しか投ずることができないのは非常に不平等なことです。真剣に考え抜かれた末の一票が、単なるファッション感覚や外見上の好み、あるいは他人からの依頼による一票と同じ価値しかないというのは、明らかにおかしなことです。

民主主義とは、選挙民に十分な情報が与えられ、選挙民がその情報を正しく解釈する力がある場合にのみ、まともに機能するものなのです。知性と真剣さを兼ね備えた選挙民がいて、初めて本来の目的を果たすことができるシステムなのです。民主主義は、一人一人の国民を同じように尊重するという厳格な平等主義に立った制度ですが、この“平等主義”が、民主主義それ自体を根底から崩す最大の原因になっているのです。民主主義が平等で正しい政治システムであるなどというのは理屈上のことであって、現実には、理想から大きく懸け離れているのです。

### マスメディアによって意図的につくられる偽りの民意・世論

さらに現代の民主主義の問題点は、世論がマスメディアによって操作され、つくり出されているということです。主権者である国民の意見が正しく吸い上げられ、中央において政策が決定されるというのが民主政治の本来の在り方です。国民の意志が正しく反映される世論政治であることが、民主主義の鉄則なのです。しかし現代では、この肝心な世論が、一部のマスメディアによって意図的に形成されるケースが圧倒的に多くなっています。規模の拡大化した大衆民主政治においては、マスメディアによらなくては、政治自体が成り立たなくなっています。

一般の国民が、独自に政治についての十分な情報を持つことは不可能です。また、たとえ自分で情報を入手することができたとしても、政治について専門的な知識を持たない中では、それをどのように判断したらよいのか分からないのが普通です。現代では国民の多くが、マスメディアを通して情報を得ています。その結果、そこで示された見解を、自分の意見として取り入れることになってしまっています。マスメディアに登場する評論家の意見を鵜呑みにしたり、ニュースキャスターの見解をそのまま受け入れたり、あるいは新聞の社説を絶対視することになってしまっています。

マスメディアによって与えられる見解は、それに係わる一部の人間の目を通して抜き出し、彼ら流の解釈をほどこした考えにすぎません。多様な現代世界にあって、バランスを失わずに、また個人的見解をいっさい交えずに社会情報を論じることなど、ほとんど不可能なのです。さらには霊界についての事実も知らず、唯物的視野しか持てない政治評論家やマスメディアに、まともな判断ができるはずがありません。

このようにして現代の世論の多くが、一部のマスメディアによって意図的に形成されることになります。それは、マスメディアを利用すれば簡単に国民を扇動し、一定の世論を意図的につくり上げることができるということを意味しています。マスメディアは現代社会にあっては、強力な政策決定の要因となっています。現実に日本をはじめ先進諸国では、マスメディアによって政治の流れがつくり出され、政策が決定されるようなことがたびたび見られます。本来、政治の脇役であるはずのマスメディアが、れっきとした主役を演じるようになってしまっているのです。こうした事態は、明らかに民主主義の理想を根底から崩すことであり、民主主義の危機的状況を招来させていると言わなければなりません。

将来的には、インターネットを活用して、直接民主制の要素が徐々に取り入れられていくようになるでしょう。しかしそうなっても、国民の一人一人に判断する力がないならば、結局は、外部のメディアによって世論が形成されるという現在の状況は変わらないと思われます。どれほど情報を入手できたとしても、それをもとに個人的な見解・意見をつくり出せない限り、民主主義の理想は、どこまでも理想のままにとどまらざるを得ないのです。

## 国民のエゴを助長させる手段となっている民主主義

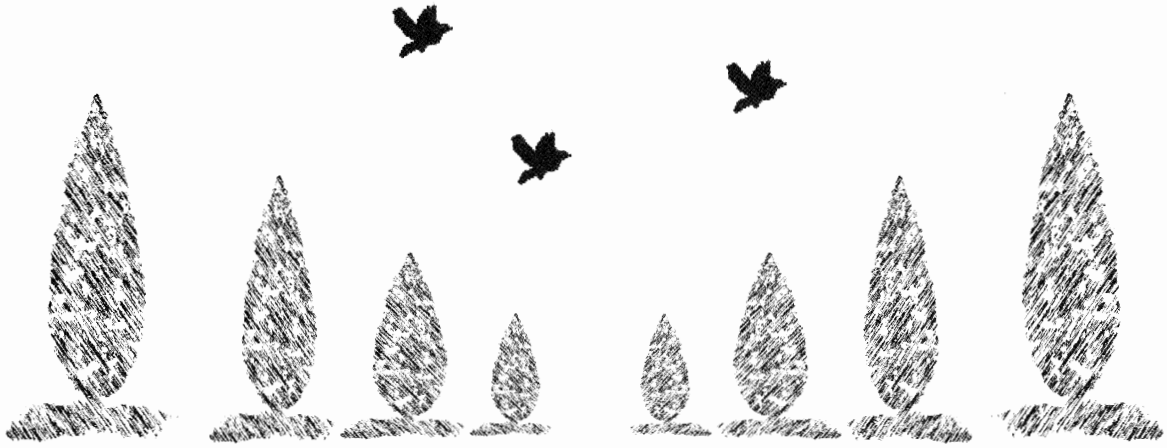
民主主義は、国民・民衆の意志が世論を形成し、それが政策を決定するという制度です。しかし、こうしたプロセスが正しく機能するのは、国民一人一人が政治についてよく理解し、利己的な立場を離れて、全体の利益がいかなるものであるかを考えることができる場合に限られます。すなわち「国民が賢明である」ということが、民主主義が正しく機能するための大前提・絶対条件となるのです。賢明な国民がいて、初めて民主主義の理想は実現するようになっています。

現代の民主主義が直面する最も深刻な問題は、多くの国民が賢明ではないということです。利己主義に染まり切って、いつも自分の利益を真っ先に考えるだけで、国全体のことを考えようとしないのです。大半の国民が、民主主義の理念を支えるにふさわしい資格を持っていないのです。人々は、質素な生活より、物質的に豊かな生活を願います。増税や株価の下落などによって、自分の利益が減ることを最も心配します。そして自分達の利益を守ってくれる政治家を選ぼうとします。贅沢な生活が続けられるような政策を政府に要求します。

こうした状況下にあっては、数によって示される民意は、必然的にエゴ的なものとなります。国民が物質的な満足と繁栄だけを望むのであれば、結果的には、エゴ的欲求を満たすような政策が決定されることになってしまいます。たとえその政策が国の将来にとってマイナスになることが明らかであっても、エゴ的要求が通ることになってしまうのです。

国民は、自分達に物質的な利益をもたらしてくれる政治家を選ぼうとします。政治家の側に立てば、自分が政治家として選ばれるためには、民衆の低俗で身勝手な要求に添わなければならないことになります。結局は、国民がエゴであれば、政治もエゴ的なものに堕ちてしまうのです。民衆という多数派が愚かであるならば、民主主義のもとでは愚かな決定しか生まれません。民衆が賢明ならば、健全な政治がもたらされます。

賢明な民衆とは、自分の物質的・本能的欲望をコントロールすることの重要性を知って、欲望の暴走に歯止めを掛けられる人のことです。もし現在の政府や政治家が良くないとするなら、それはつまるところ「国民が愚かである」ということなのです。



## 「衆愚性」は民主主義の宿命

民主主義とは、国民が物質欲をコントロールする賢明さを持ち、私利私欲を離れ、損得を越えられる限りにおいて良いシステムとなり、健全さが保たれることになります。しかし国民が自分の欲望の満足だけを求めるような場合には、国家の発展や利益は後回しにされ、国は食い物にされることになります。

唯物的視点しか持ち得ないマスメディアと、自分のことしか考えられない程度の悪い国民は、「衆愚政治」を出現させることになります。衆愚性は民主主義の最大の敵であり、民主主義の理想を根底から崩す張本人です。歴史が明らかにしているように、衆愚政治のあるところ、その国は必ず衰退の道をたどることになるのです。

人々が物質主義に支配され、物質的な快楽を政府に要求するならば、「衆愚政治」の到来は必至なのです。現在、日本をはじめ地球上の多くの国々が、民主主義によって衆愚政治をもたらしているのが実情です。

## 民主主義は欠陥原理 ――「肉主霊従」に立脚した民主主義は、独裁政治と大差なし

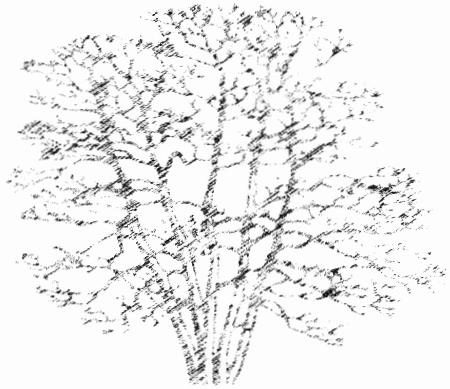
以上、民主主義の問題点を見てきましたが、民意を尊重し、それに基づいて政治が運営されるという民主主義の理念は、現代では根底から崩れ去ろうとしていることは明らかです。民主主義は、その理念によって自壊する道を歩まざるを得なくなっています。

政治は国民の欲望によって動かされ、物質欲追及の手段に成り下がっています。国民のエゴイズムがつくり出した衆愚政治と、マスメディアによる世論支配は、現代の政治を民主主義の理想から大きく懸け離れたところに追いやっています。民主主義のそうした結果は、国民の「エゴイズム」や「肉主霊従性」にその原因があるのです。独裁政治の弊害を克服するために登場した民主主義も、結果的には、独裁政治に劣らないような多くの問題と欠点を生み出しているのです。

こうした民主主義にともなう問題点を根本的に解決するには、「肉主霊従」が支配的となっている人々の心・考え方を変えることしかありません。一人一人が自己の利益を離れ、全体の利益を先に考えられるようになるしかありません。個人的見地より、公共的見地を優先するようにならなければなりません。「衆愚性」という致命的な欠陥を克服することができない現在の民主主義よりは、一人の賢明な君主による“哲人政治”の方がずっとまし、ということになるかも知れません。

民主主義は、現代人が賛美するような決して素晴らしいものではありません。何度も述べますが、地上の政治は、不完全な世界における不完全な人間の営みに他ならないのです。そして民主主義というシステムが悪用される結果、多くの人々は、さらなる肉主霊従の方向へと堕落していくことになります。

霊界の人々が、地上の政治にほとんど期待を寄せないのは、こうした事情があるからです。民主主義を土台とした現代政治は、「物質主義」と「利己主義」に支配された地上人類の低次元の営みの一つにすぎないということなのです。



## 2 民主主義のもとで堕落していく地上人――地上人の心を堕落させるのに都合がいい民主主義

### 民主主義がもたらす財政赤字

民主主義のもとにおいては、愚かな国民は「衆愚政治」を現出させることになります。国民は政府に目先の物質的繁栄を優先させ、無い物ねだりを続けることになります。政府に十分な資金があれば、そうした国民の要望を聞き入れることができます。しかし国民の要求は無制限に膨らんでいくのが普通であって、政府がそれに応えようとすれば、必然的に財源が不足し、財政赤字を引き起こすことになります。

もし政府が国民の要求をはねつけたり抑えたりできるならば、財政赤字を避けることができるのですが、民主主義の世界では、それは非常に困難なことなのです。なぜなら絶えず反対党から足を引っ張られている政府としては、国民の意向を無視して政権を維持することは不可能だからです。国民の人気取りを行なわなければ、政権を維持することはできないのです。

国民の多くが政府に対して、さらなる物質的な豊かさ・物質的利益を要求します。景気が良くなって、今よりもっと収入が増すことを願い、心地よい生活のために福祉の充実を求めます。そこで政府は資金を出して公共事業を起こすことになります。政府主導による公共事業は景気を押し上げ、一時的には、確かに効果的な景気刺激策となります。そうした景気刺激策と同時に税金を下げれば、国民の懐にはお金が残るようになり、多くの物が買えるようになります。国民が望むリッチな生活を楽しむことができるようになります。減税されて怒る国民はいません。しかし、こうした国民の人気取り政策を行えば、財政支出が増加し税収は減少し、財政赤字はどんどん大きくなっていきます。

日本政府はこうした赤字を埋め合わせるために、毎年毎年国債を発行してきました。国債という借金を増やし続けてきました。それによって――「もっともっと物質的に豊かになりたい、もっと贅沢をしたい」という国民の要求に応えてきたのです。しかし、たとえ国家であっても、他人から借りたお金・借金は返さなければなりません。借金がどんどん増え続けるのが悪いことぐらいは誰でも理解できます。

自分の家庭なら、できるだけ借金をしないように努力します。まず贅沢をやめ、収入に見合った生活をしようと心がけます。日常の生活費を切り詰め、買いたい物も買わないようにします。たまには遊びに行きたいと思っても我慢します。このように個人の家計であれば、普通は贅沢に対して一定の歯止めが掛けられます。

もし借金による贅沢を続けるならば、いつかは破綻がきて、大変な苦しみを味わわざるを得なくなります。連日、借金取りに追われ、身を隠すような羽目に陥るかも知れません。職場にも借金取りが押しかけ仕事を続けるのも困難になり、子供を学校に行かせることさえできなくなるかも知れません。つまり個人であれば、借金の積み重ねがいかに悲惨な事態を招くようになるかを、自分の痛みとして直接感じられるようになっているのです。

しかし国家に借金をさせ、それによって自分達が贅沢ができるとなると、借金の痛みを直接感じるようなことはありません。国の借金で贅沢をし、しかもその借金は自分で返さなくてもいいとなれば、人間の欲望はさらにエスカレートしていくのは当然です。それに対して政府は、自制を促すどころか、人気を失い政権が維持できなくなるのを恐れ、国民の剥き出しの欲望に迎合しようとします。そして政府の赤字はどんどん膨れ上がっていくのです。

いったん生じた財政赤字をなくすためには、政府は支出を減らし、収入を増やす（増税）しか方法はありません。しかし、そのいずれに対しても国民は猛烈に反発することは目に見えています。政府がどれほど困ろうが、国民は自分達の懐が豊かになることだけを要求するのです。国民は政府にさらなる借金を促し、贅沢な生活を続けることができるように仕向けます。

「肉主霊従」に支配された人間の物欲中心主義は、こうした形で現代の日本の政治を左右することになっています。そしてその結果、今では日本国家は借金で身動きできないようなところにまで追い込まれてしまいました。借金による分不相応な生活に溺れ、そこから抜け出せなくなった破綻者が、取りも直さず、私達日本国民であるということなのです。しかし、それでも自分の力で贅沢をやめることができず、さらなる借金を積み重ねようとしているのです。

## “借金地獄”に落ち込んだ日本国家

これまで日本国民は、国家の赤字（財政赤字）が大きければ大きいほど贅沢をすることができるため、政府の景気振興策と減税を歓迎してきました。しかし、それによって日本政府は年々、大幅な赤字を増加させることになっています。日本における借金の代表は国債です。国家の抱える赤字は膨大なものとなり、それにともない利息（金利）の返済額も大きくなっていきます。今、日本における金利負担（利息の返済額）は、政府の年間実収の４分の１にまで及んでいます。こうした金利返済のためのお金は、国民に何の利益も還元しません。利息とは、ただひたすら返さなければならないお金なのです。

なお深刻なことは、日本政府は、もはや国民からの税収によってこの金利を支払うことができず、新たな借金をして返済に当てざるを得なくなっているということです。借金の利息が返せないので、さらにお金を借りて（＊新たな国債発行という形で）、これに当てるという“借金地獄”に落ち込んでいるのです。

日本国家の財政はすでに破綻しています。これは個人であれば、あちらこちらから借金を重ね、その場しのぎをしていくしかない状態であるということです。十分な収入もなく、返済のめども立たず、破滅すると知りつつ借金を続けていく末期的な状況に陥っているのです。

**＊日本政府が置かれている状況を分かりやすく説明するために、一般の個人の家庭に当てはめると次のようになります。**

**年収５２０万円の家庭があります。その家庭はこれまで毎年お金を借り続けてきたために、積もり積もった借金の総額が３６４０万円になっています。この借金に対する利息の支払いは、毎年２２０万円にものぼります。年収の５２０万円では自分達が生活していくのに精一杯で、とても利息の返済はできません。そこで仕方なく新たに３２０万円の借金をして、そこから利息を返すことにします。こうして借金を続けていくしか、生活が成り立たなくなってしまっているのです。**

**＊現在の日本は、超低金利で進んでいます。そのために現実の金利負担はきわめて小さくて済んでいます。貯金をしている国民の立場からすれば、それは銀行を保護するだけのことで、全くけしからんということになります。しかし、この超低金利政策は、国家の赤字財政には大きな助け船となっています。**

**もし今後、従来通りの超低金利政策を続けることができなくなり、金利水準を引き上げざるを得なくなれば、そのとき国家の赤字財政は一気に深刻さを増すことになります。**

## 消費拡大のために、さらなる借金を重ねる愚策

際限なく物質的快楽を求める国民のエゴイズムに迎合し、小手先だけの対策でごまかしてきた日本の民主政治は、「国家の財政破綻」という悲劇を迎えることになりました。しかるに国民はなお、景気回復対策のために、政府にもっと借金をせよと要求しているのです。

景気回復対策といえば、これまではずっと公共事業が効果的と考えられてきました。しかし、それは高度経済成長時代において言えることで、現在のような不景気の時代には、経済波及効果はほとんど見られず、公共事業に対する限界が問われるようになっています。

公共事業と並ぶ景気対策としては、「消費の拡大」があります。人々が多くの物を買ってくれれば、企業は生産を回復することができ、政府に入る税収も増加すると考えられてきました。このため政府は「減税」をして、国民が消費に向かうように仕向けることになります。これまでの政府は消費の拡大を呼びかけてきました。「消費の拡大」とは、言い換えれば、国民にもっと贅沢をして欲しいということに他なりません。

そして、この景気対策としての極めつけの愚策が、小渕内閣における“地域振興券”という国民への小遣い配布だったのです。これによって「もっと消費をしてください」という、まさに呆れるような政策を実行に移したのです。もちろん、そのための費用（７７００億円）は、国民からの借金であてがわれたことは言うまでもありません。しかし地域振興券によって何とか消費を拡大させ、景気回復を図ろうという政府の思惑は外れ、国の借金だけが残ることになりました。

さらなる借金が、間違いなく国家を今以上の破局状態に陥れることが分かっていながら、いまだに景気回復のために新たな公共事業を増やせといった、いっそうの借金政策を主張する政治家もいます。すでに国家財政は破綻し、国の経済は衰退の方向に向かっています。我が国における民主政治のもたらした結果は悲惨なものです。これが民意を尊重するという民主主義が引き起こした「衆愚政治」の結末だったのです。

## 膨大な借金大国アメリカと、そのアメリカ人の贅沢によって支えられている世界経済

日本国民は分不相応な物質的豊かさを政府に要求し、その結果、膨大な財政赤字を生み出してしまいました。一方、アメリカもまた、国民が徹底して物質的贅沢と快楽を求めた結果、膨大な赤字をつくり出しています。現在のアメリカ社会は、惑星地球を支配する物質主義・欲望主義の状況を、最も凝縮して表しています。アメリカ社会には、「肉主霊従」という精神的な堕落が、最もストレートな形で現出しています。

アメリカは２０世紀を通じて、世界で最高の権力と支配力・最高の地位を獲得することに成功しました。またアメリカは、民主主義を地上世界の正義として世界に普及させてきました。日本をはじめとする他の国々の人々は、物質文化を最高に極めたアメリカを目標とし、これを理想として近づこうとしてきました。世界中の若者達は、アメリカの物質文化に魅了され、アメリカ的な物の豊かさに病的とも言えるような憧れを抱いてきました。

２１世紀を迎えた現在、アメリカは世界で唯一の超大国として君臨し、世界最大の経済大国として世界経済を牽引しています。これまでアメリカは記録的な長期にわたる景気上昇を続け、大量に世界中から輸入を続けてきました。世界各国から物を買い入れ、世界で最も豊かな物質生活を楽しんできました。アメリカは世界最大の消費国であり、国民はこぞって世界中からあらゆる製品を買い漁っています。クレジットカードという便利なものができたために、自分が持っているお金以上の物を買う人々が増加し、

異常な消費ブームを引き起こしてきました。

このアメリカ人の贅沢な生活のお蔭で、日本をはじめ世界各国は多くの物（製品）をアメリカに輸出し、それによって世界中の景気が支えられてきました。しかし当のアメリカは輸出が減少し、輸入が大幅に超過することによって、莫大な貿易赤字を出すことになってしまいました。

アメリカはかつて豊富な資金を溜め込んだ時期がありました。２０世紀アメリカの黄金時代に、６０年間かけて３千億ドルという膨大な資金をつくり上げました。しかし、その膨大な資金を、わずか３年間ですべて使い果たしてしまったのです。世界中から大量に物を買い込んだために、それまでの蓄えをあっと言う間に使い果たし、赤字国に転落してしまったのです。そして、その後も世界中から物を買い続け、貿易赤字を膨らませることになりました。

普通、弱小国家が資金不足に陥ると、なかなかお金を借りることができません。後で返済できなくなる危険性があるため、誰もお金を貸してくれないのが普通です。外国からお金を借りたくても、借りられないのが弱小国家の実情なのです。

しかしアメリカはその点でも、世界で特別な国家です。アメリカは世界で唯一の超大国であり、アメリカに対する信頼感は絶大です。世界中の人々は、アメリカに資金を貸すことに何の心配もしないのです。そのために大量の資金が、アメリカに流れ続けることになりました。アメリカは、日本をはじめ世界中から借金をすることによって、膨大な赤字を抱えながらも世界中から物を買い漁り、贅沢な生活を維持することができるのです。

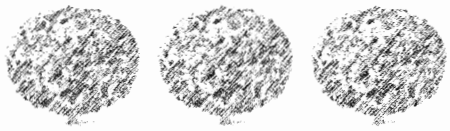
日本もアメリカに多額のお金を貸し（＊日本企業がアメリカの国債や株を買うという形で）、アメリカはそのお金で、日本からさまざまな製品を買い続けました。日本の経済は、そうしたアメリカの借金経済によって支えられてきたのです。しかしその結果、アメリカの貿易赤字は年毎に増加し、うなぎ登りに膨れ上がっています。

今やアメリカの経済が崩壊すると、日本の経済も崩壊するといった関係にあります。日本の経済を支えている主要企業の多くは、アメリカへの製品輸出で多額の売上を得ています。アメリカ経済が崩壊すると、日本製品は売れなくなり、深刻な不況に見舞われることになります。このため歴代の政府は、アメリカ経済を擁護する方向で政策を立てざるを得ませんでした。そしてそれが原因となり、日本の“バブル経済”を生み出すことになってしまったのです。

### いつかは必ず訪れるアメリカの経済破綻

アメリカ経済は好条件に恵まれ、１９９１年４月から好況に転じました。そしてアメリカ史上最高と言われる空前の好景気は、１０年以上にも及びました。その間、果たしてこうした好景気がいつまで続くものかと、危惧されてきました。もし人々がアメリカ経済の先行きに不安を感じ、資金を貸すことを渋り始めたら、アメリカはたちまち資金不足となり、深刻な不況を迎えることになります。アメリカの株の暴落は、日本の株式市場にもすぐさま波及し、大暴落を招くことになります。その時には、アメリカに貸していた多額の資金を、本当に返してもらえるかどうかの保証はありません。もし、そうした事態が現実のものになれば、間違いなく世界規模での恐ろしいほどの大パニック（世界恐慌）を引き起こすことになります。日本の株式市場は、いつもアメリカの動向に神経をとがらせています。

今年に入ってから、アメリカ経済に好景気をもたらしてきたＩＴ産業にかげりが見られるようになりました。ＩＴバブルが急減速し始めたのです。アメリカ経済の後退に対する不安が世界中に広がっています。しかし現時点では、アメリカという超大国が破綻するはずはないという幻想（期待）が、依然として世界中から資金をアメリカに集めさせることになっています。いずれの投資家も、アメリカが破滅状態に陥るなどということは考えたくないのです。そして今回の同時テロ事件によって、株価が急落し、大きな不安が走りました。



現在、アメリカ人の贅沢によって牽引されてきた世界経済は、いつ破綻してもおかしくないような危い状態にあります。しかしそれに対し、アメリカ自身も他の国々も、効果的な対応策を打ち出すことができずにいます。これまで築き上げてきた物質的繁栄が崩れてしまうことを、誰もが恐れています。物質中心主義に支配されている地球上の人々にとって、アメリカ経済の破綻は最も恐るべき出来事です。そのため世界各国の政府は、そうしたパニックを何としても避けようと必死になっているのです。

アメリカ国民の大量消費（贅沢）に支えられ、何とかバランスを保っているような狂った世界経済に、いつか破綻がくることは避けられません。霊的視点に立てば、物質世界の法則を逸脱したところには、それに見合ったしっぺ返しがくるのは当然のことなのです。膨れ上がった矛盾を修正するための反動は、間違いなく、いずれかの時点で生じることになるのです。限度を超えた飽食を続ければ、いつか必ず病気になるように、アメリカ経済も飽食による異常な肥満によって、自ら病気を引き起こすことになるのです。

## アメリカの政治的腐敗と国民精神の堕落
## ――クリントンの不倫問題に見るアメリカ人の「肉主霊従性」

政治的なスキャンダルが持ち上がるたびに、決まって政治家のモラルが問題にされます。しかし程度が悪いのは政治家に限ってのことではなく、国民も同様なのです。現代政治のさまざまな問題点を突き詰めていけば、結局は、国民が物質中心主義に支配され、物質的な快楽と満足を求め、金と地位だけが力を持つという価値観にとらわれているという現実に行き着くのです。地上を覆う「物質至上主義」が、まさに政治を腐敗させる根本原因となっているのです。

こうしたことを端的に示しているのが、前アメリカ大統領クリントンの不倫問題に対するアメリカ国民の反応だったのです。クリントンの女性スキャンダルは、単に彼一個人の問題ではなく、アメリカ社会を投影する問題として見るべきです。ルーズベルトやケネディーの女好きもよく知られていますが、クリントンの場合はその悪質さの程度が限度を超えていたために、彼らとは比較にならないほど、アメリカ大統領という聖なる職種を地に貶（おとし）めることになりました。欧米に比べ政治家の女性問題に比較的寛容だと言われている日本においても、宇野総理のように女性スキャンダルによって辞任に追い込まれたケースもあります。

そうしたことを考えると、あれほどの恥ずべきスキャンダルが表沙汰にされたにもかかわらず、クリントンが大統領の任期を全うすることができたことは異常と言わなければなりません。クリントンは大統領という一国のリーダーでありながら、一般の国民が持つべき常識的モラルのひとかけらさえもなかったのです。そのような大統領に対して、不倫疑惑の中にあっても、アメリカ国民はなお６５％もの高い支持を与え続けたのです。

このことは、アメリカ国民が大統領に人格性などは全く求めず、ただ経済的な繁栄と物質的な豊かさだけを期待していたことを示しています。多くのアメリカ人がクリントンに対し、「満足できる仕事さえしてくれれば、個人のモラル観は関係ない」としました。アメリカ国民は、ただ物質的な満足だけを与えてくれるなら、どのような大統領であってもかまわないとしたのです。アメリカ国民は、空前のアメリカの好景気を維持し、これまで通りの物質的繁栄を続けさせてくれるなら、それ以外のことは問わないとしたのです。ここには、アメリカ国民が、低い物質主義にとらわれている姿が端的に示されています。クリントンは民主主義というシステムにのっとって、物質欲に目がくらんだアメリカ国民の支持を取り付け、任期を全うすることができたのです。

## 3 日本の財政破綻を救うためには

### 経済の大幅な水準低下の必要性

オイルショック以降、現在に至る２５年の間に、日本政府の財政赤字は取り返しのつかないほどに膨れ上がってしまいました。現在では、政府が国債の形で負っている借金の総額（国債残高）は、３６４兆円（＊２００１年３月）に達しています。これは国民一人当たり２８７万円に相当します。４人家族なら１１４７万円になります。

この借金を返すには、他に一切の支出がないとして７年かかる計算になります。これは常識的に考えれば、完全な破産状態であり、一般の家庭なら到底やっていけない末期的症状と言わなければなりません。（＊これが国と地方を合わせての借金となると、６６６兆円とさらに膨らみ、国民一人当たり５００万円の借金となります。）

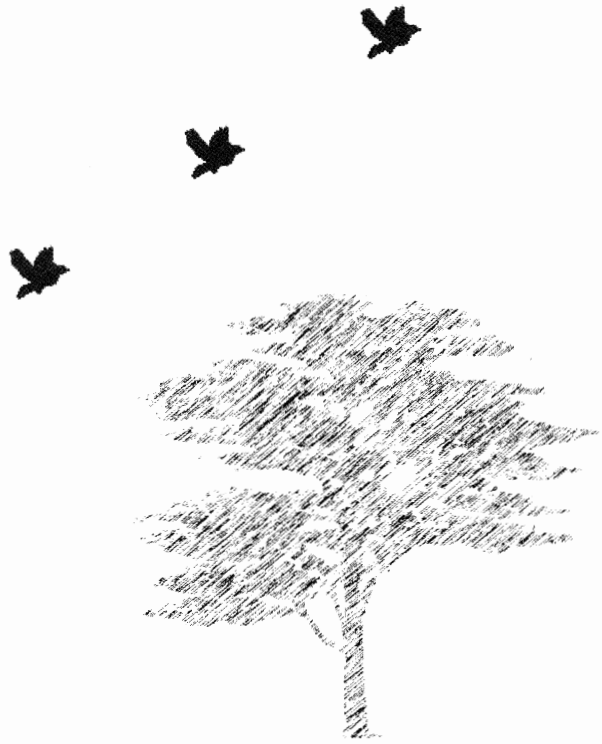
しかし、そうした非常事態にありながら、これまで日本政府は何ら有効な手を打たずにきました。これほどまでにひどい状態に至ってしまった最大の原因は、すでに述べたように、国民が際限なく物質的豊かさを政府に要求し続けてきたことにあります。国民の物質中心主義・物質的快楽主義が、こうした悲惨な結果を招くことになってしまったのです。

本来ならこのような状況にあって政府がとるべき手段は、緊急の大増税と思い切った歳出削減しかありません。しかしそうした政策は、不景気を呼び込み、企業の倒産を増大させ、失業者を急激に増やすことになります。個人レベルにおいては、ボーナスもカットされ、収入も減少することになります。当然、これまでのような生活を維持することはできなくなります。車の買い替えができなくなったり、ゴルフや旅行に行けなくなります。住宅ローンが返せなくなり、やっとの思いで手に入れたマイホームを手放すようなことになるかも知れません。さらには、これまでの仕事以外にアルバイトまでしなければ、やっていけなくなるかも知れません。

そうした事態になれば、国民の中から激しい不満と反発の渦が巻き起こることは明らかです。しかしこうした痛みは、子孫に借金のツケを残さないために、私達が今、当たり前のこととして受けていかなければならないものなのです。これまで無い物ねだりをして、政府を食い物にしてきたツケは、自分達の手で返さなければならないのです。

現在、日本の置かれている厳しい状況を救うための方法が、専門家によってあれこれと考えられていますが、その解決方法はこれまで繰り返し述べてきたように、支出の削減と収入の増加（増税）以外にはないのです。すでに右肩下がりの経済状況に入った中で、新たな景気回復による増収は期待できません。またすでに十分な物質欲を満たした国民が、急激に消費に走るようなことも考えられません。

国家の赤字財政を救うためには、「支出削減」と「増税」という単純な方法しかないのですが、それは経済の大幅な水準低下を確実にもたらすことになります。こうした政策は、肥大し過ぎた経済を縮小して、力相応のレベルにまで引き戻すことに他なりません。別の言い方をすれば、政策的に景気を悪くさせるということです。意識的に経済を落ち込ませるということです。それは当然、国民にとって最も歓迎されざる政策となります。



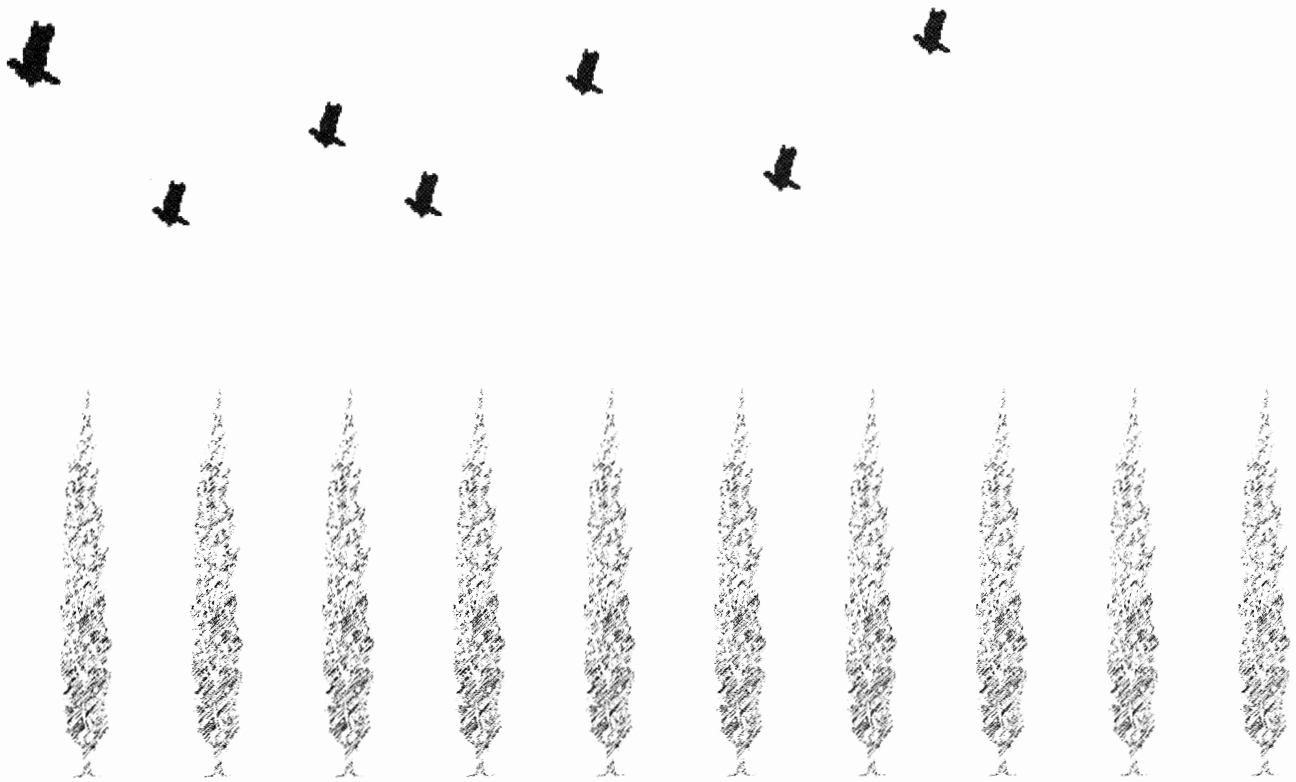
## たとえ、どれだけ痛みがともなっても

公共事業の削減、年金を含めての社会福祉の見直し・削減、教育関係費や助成金の削減、ＯＤＡの削減（＊日本はもはや他国を助けられるような状態ではない）、公務員の人員削減など大胆に進めなければなりません。あらゆる分野に対してメスを入れなければなりません。しかし財政赤字を減らすためには、単に支出を削減すればいいというわけではありません。財政構造改革によって支出を抑えるだけでなく、増税によって収入を殖やさなければならないのです。そうでない限り、積もり積もった借金（元金）を返済するレベルにまで、到底至ることはできないのです。

このような財政改革は、多くの日本国民を、かつて味わったことがないような厳しくつらい現実に直面させることになります。１９９７年に、当時の橋本内閣が、消費税を３％から５％に引き上げただけで大騒ぎになりました。このために景気が失速し、橋本政権は退陣を余儀なくされることになりました。現在、日本が抱えている膨大な借金を削減するためには、ヨーロッパ諸国並の消費税率（１５～２０％）を大幅に上回る、３５％以上もの消費税率への引き上げが必要と言う専門家もいます。

政府は、そうした大改革にともなう痛みを当然のこととして、国民に忍耐を要求しなければなりません。国民に対し、これまでのような贅沢はできないこと、質素な生活に切り替えなくてはならないことを訴えなければなりません。国債をどんどん発行するということは、子孫に負債を残すということです。もし私達が借金を返さないなら、子孫がそれを返さなければならなくなるのです。莫大な借金だけを子孫に残すということは、大いなる恥です。重荷だけを一方的に背負わされた子孫から軽蔑されることは、はっきりしています。自分達がつくった借金は、自分達で返さなければ日本の将来はありません。

日本の将来のことを考えたならば、たとえ国民がどれほど反対しようが、今はそうした政策を果敢に押し進めなければならない、ぎりぎりの事態に至っているのです。これまで分不相応の贅沢と快楽に浸り切った国民に、ショックと犠牲を強いるのは当然のことなのです。その痛みは、贅沢を当たり前と思っている日本人が、あるべき姿に立ち戻るための必要なプロセスなのです。



## 霊的に見れば、不景気はありがたいもの

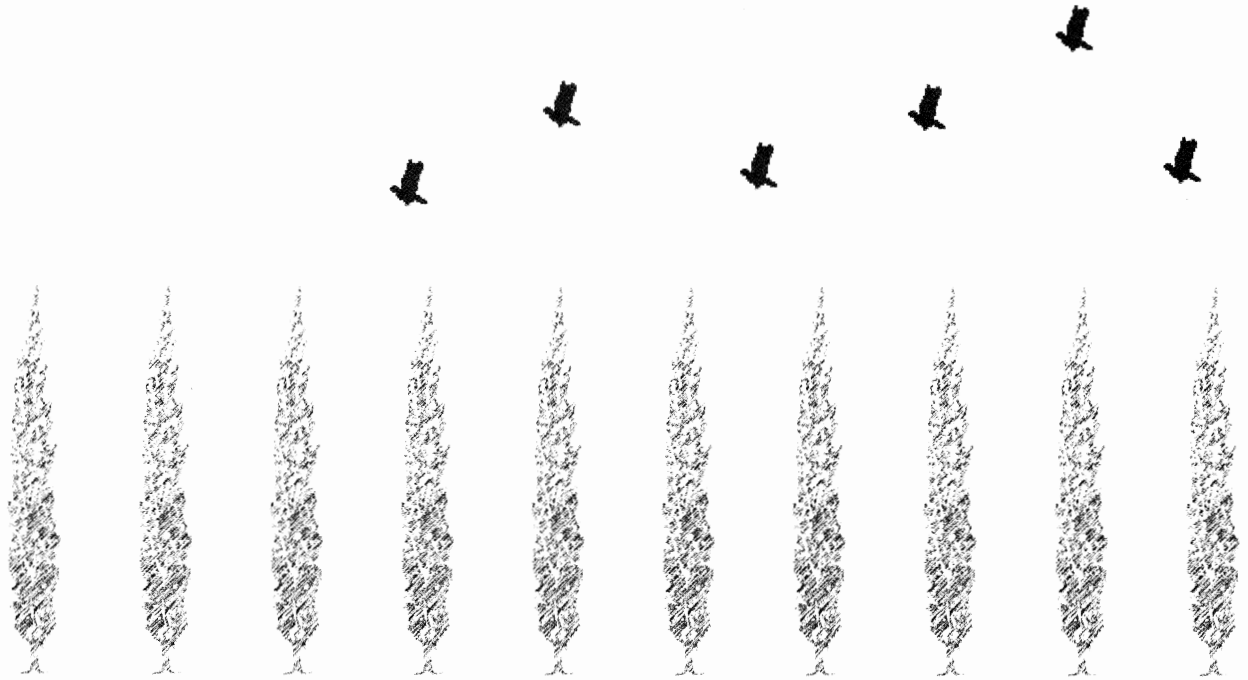
そうした苦しみは、大半の国民には、大変な不幸・悲劇と映るかも知れません。しかし視野を広げ、全地球的な立場から考えてみれば、これから日本が不景気になり、生活が苦しくなるといっても大したことではありません。毎日の食べ物にも不自由している発展途上国の貧しさとは比べものになりません。「車が買えない、旅行やゴルフに行けない、家が持てない、持ち家を手放さなければならない」といって、それがどうだと言うのでしょう。悲惨などといって騒ぐようなことではありません。会社が潰れたからといって何が悲劇なのでしょうか。日本にいる限り、見栄さえ捨てれば何とか生活していけるはずです。霊的視点から見れば、それで十分ではないでしょうか。

肉体という、短い地上人生を歩むための道具は、維持できればそれでいいのです。死ねば物質的な物はすべて無に帰すのです。不景気だからといって、必要最低限度の生活物資に困窮するようなことはありません。物質中心主義の視点から見れば“悲劇”と思えることが、霊界の視点からは「大きな恩恵」であることが頻繁にあるのです。不景気は、人間を質素な生活に導く歓迎すべき出来事です。世界経済の破綻は、地上人類の霊的進歩にとって、間違いなくありがたいものになるはずです。

## 政治家の本来の使命とは

本来なら政治家は、国民が愚かな欲望に目がくらみ、エゴ的な方向に流れていくのを食い止め、方向性を正さなければなりません。国全体を衰退させることになる国民のエゴ的要求を抑えコントロールすることが、その使命なのです。それが一般国民と違って、大局的に国の動向や状態を知ることができる専門家としての義務なのです。しかし現実には、そうした正論を主張できる政治家はほとんどいません。大半の国民が自分のことしか考えられないエゴイストであるように、多くの政治家も、自分の利権と政治生命だけを真っ先に考えることしかできないのです。

政治家のもう一つの使命は、国民の霊的成長を促すような環境づくりに貢献することです。そのためには、政治家自身が物質主義を越えた霊的な価値観を持つことがどうしても必要となります。物質世界を、霊的観点から見下ろすことができたとき、地上世界に何が必要なのかが、はっきりと分かるようになります。「霊的真理」を知らない者は、本当は政治家になる資格はないのです。現実には、まだまだそうしたレベルにまで内面性のともなった政治家はいません。



## 「小泉改革」の意義

現在、日本が抱えている最大の問題は財政赤字です。この問題に対する根本的な解決法は、すでに述べたように、歳出削減と増税という「経済縮小政策」以外にはありません。これらの政策は国民にとっては最も厭うべき政策であるために、歴代の政府は手をつけずに今日まで先送りしてきました。その結果、膨大な借金をつくり上げることになってしまったのです。歴代の政府のいずれもが、その必要性を知りつつも、本気になって赤字減らしに取り組もうとしませんでした。手術でしか治らない病気にかかっているのに、手術が怖いと言ってズルズルと延ばしてきたのでした。

そうした中にあって、「小泉改革」では初めて、財政赤字をこれ以上増やしてはならないという明確な方向性を打ち出しました。赤字を増やしてはならない、赤字は減らさなければならない、そのためには財政構造改革を大胆に進めなければならないと、初めて当たり前のことを唱え、それに本腰を入れて取り組もうとしています。手術をすぐにでも始めようとしています。

スピリチュアリズムの観点からすれば、小泉改革は、物質欲に暴走する国家と国民に、まともな歯止めを掛けようとしているということです。暴走する国民の「肉主霊従性」に、ストップを掛けようと動き出したということです。これはスピリチュアリズムの観点から見たとき、大いに評価されるべき有意義な改革と言えます。

しかし、現在示されている改革内容では、とても十分とは言えません。赤字を削減し、さらには借金を返済するために避けて通れない「増税」については、その必要性を強く打ち出してはいません。景気後退は不可避であることを、十分に明言していません。これには当然、政治的な駆け引きがあってのことだと思われますが、本来ならば、改革とそれにともなう苦しみの全見取り図を、前もって国民に提示して、覚悟を促しておくべきなのです。２～３年の景気低迷で終わるはずのないことを、はっきりと国民に示しておかなければなりません。小出しの改革では、ズルズルと続く苦しみに、国民の心理が耐え切れなくなる可能性があります。こうした点を考えると、小泉政権における改革が、どこまで徹底されるのかに疑問が残ります。

しかも小泉首相は、どのような反対があっても８月１５日に靖国神社に参拝するとの公約を、外圧に屈して翻してしまいました。財政改革に反対する側の圧力は、靖国神社参拝のときとは、比較にならない厳しいものになるはずです。外圧に屈し公約を翻したということは、財政改革における後退の可能性を予測させます。事の重要性を知らない国民は、口では痛みを甘受すると言うものの、その一方で、やはり構造改革よりも景気対策を願っているのが実情なのです。もし構造改革の手初めとなる不良債権処理問題を先送りするようなことがあれば、すべての改革は腰砕けになり、橋本内閣と同じ失敗を繰り返すことになるでしょう。

小泉首相個人は、捨て身で国家のために働こうとする決意を持って出発しました。私達スピリチュアリストも、小泉政権でのさらなる構造改革の進展を支持したいと思います。小泉改革が失敗したときには、日本はもはや、自力では経済を再生させられないことが明らかになるでしょう。後は、ＩＭＦ（国際通貨基金）の管理下に置かれ、恥辱の中で強制的に大手術を施されない限り、立ち直ることはできなくなるかも知れません。日本は今まさに、そうしたきわめて危ない局面に立たされているのです。

# スピリチュアリズムこそ地上世界変革の担い手 ―変革の主役は政治ではなく“スピリチュアリズム”

## 1 地上世界の根本変革は、スピリチュアリズムによってのみ可能となる

### 地上世界の問題の根本解決は、一人一人の「心の変革」から

スピリチュアリズムでは、政治によって、地上世界の諸問題を根本的に解決することは不可能であると考えています。政治という方法では、どんなにがんばってみても、地上世界を根本的に変革することはできません。政治家の中には、社会を改革し、もっと住みやすい世の中にしようと人生を捧げている純粋な人もいます。しかし、そうした奇特な心がけにもかかわらず、政治という手段には初めから大きな限界と制約があるのです。それは、政治では、人間の心を最も深いところから変えることはできないからです。

「肉主霊従」という人類の底辺に共通する問題を解決しないうちは、いくら人間社会の改革を目指しても、結局は徒労に終わってしまうのです。現在、地上世界に生じているさまざまな問題は、「物質中心主義」と「利己主義」に起因します。この根本的な原因にメスを入れない限り、次々と表面化してくる新たな問題の根を断ち切ることはできないのです。空しい、いたちごっこのようなことを続けなければなりません。すべての問題解決は、最も根本的な原因から出発しなければならないのです。

> 摂理を無視した方法で地上世界を築こうとすると、混乱と無秩序が生じます。必ず破綻をきたします。
>
> 〈シルバーバーチ11・186〉

政治によって表面上の社会制度を変えることはできても、本当に公正・平等な社会を築くことはできません。一人一人の心の変革によって、「霊主肉従」が地上人類の支配理念になったとき、初めて公正・平等という理想が地上世界に根付くことになるのです。

繰り返しますが、地上世界の根本変革を図るには、人間の「心の変革」から出発しなければなりません。一人一人の人間が「霊的真理」を受け入れ、それを実行に移すことによって、地球上に真の変革が進行していくようになるのです。したがって「霊的真理の普及」が、あらゆる政治活動に優先されなければなりません。たとえ民主主義が世界の隅々にまで行き渡ったとしても、人間の心の問題が解決しないうちは、地上により良い世界が実現することはないのです。

現在の地球は、霊的進化のレベルにおいて下から二番目という低さにあります。“霊的光”がほとんど見られないような暗黒の世界となっています。そしてその低い霊性が、利己的主張と利権獲得のための弱肉強食の世界をつくり出すことになってしまっています。永い時を経て、この地上世界が「思いやり」と「利他愛」の論理によって支配されるようになるまでは、エゴのぶつかり合いがなくなることはありません。日本を含め地上世界の政治は、今後もエゴイズムに翻弄され、“弱肉強食”の醜い争いの中で推移していかざるを得ないのです。

## スピリチュアリズムほど、確実で効果的な変革はない

霊的真理による心の変革は、気の遠くなるほど時間が掛かることのように思われるかも知れません。しかし現実には、それに優る確実で効果的な方法はありません。スピリチュアリズムにおける地上世界の変革は、一人一人の人間の心に向けての働きかけから始まります。一人一人の地上人が、「肉主霊従」から「霊主肉従」へと心の内容を変化させていくことによって進んでいきます。

当然、そうした変革のスピードは非常にゆっくりとしたものにならざるを得ません。そのためスピリチュアリズムのような方法では、実際に世界を変えることなど、とてもできないと考える人も現れます。スピリチュアリズムは立派な理想を説いているけれども、現実的ではない。目的が成就するまでに、あまりにも時間が掛かり過ぎて、その間、苦しむ人々を救うことができないと言う人もいます。

確かに地上の政治と比べるならば、スピリチュアリズムにおける変革の進み具合はゆっくりとしているように見えます。変革の具体的な進展状況が、地上人の目からは分かりにくいのも事実です。しかし、スピリチュアリズムによる地上世界の変革は、現実離れした理想主義的なものではないのです。それどころか、スピリチュアリズムによる変革ほど、トータル的に見て、最も確実で効果的な方法はありません。結果的に、これほどスピーディーな変革はないのです。

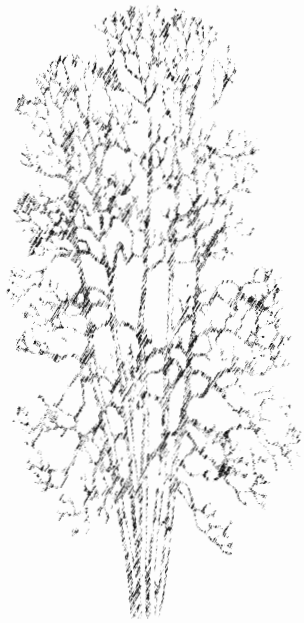
## 霊界の高級霊によって進められる地上の変革

スピリチュアリズムにおける変革こそ最高のものである、という意見に批判的な人は、霊界という人間にとって最も重要な世界の事実を知りません。地上は霊界へ行くための大切な準備の場であることや、地上の生活は一時的であり、霊界での生活が永遠であることを知りません。

そうした限られた物質的視野しか持てない人々には、地上世界の出来事を正しく評価することはできません。霊界という永遠の世界を考慮しなければ、正しい判断を下すことはできないようになっています。より高い世界に立ってこそ、低い世界の全体を誤りなく見通すことができるのです。

霊界の存在を信じられない人々にとって、スピリチュアリズムが目指す世界は、ほとんど現実離れしたもののように映ります。しかし、それはスピリチュアリズムが、霊界の人々が主役となって進めている「人類救済のためのプロジェクト」であることを知らないからなのです。もし地上人の力だけで、人類の救いを成し遂げようとするなら絶対に不可能なことですが、スピリチュアリズムの背景には、何百億という高級霊の軍団が控え、全力で働きかけているのです。それゆえ地上人の常識では想像もつかないほどの、遠大なプロジェクトが実現可能となるのです。スピリチュアリズムが掲げる「地球変革」は、単なる理想論や実現不可能な観念論ではありません。時間とともに、間違いなく地上世界に展開していく確たる事実であり、具体論なのです。

こうしたスピリチュアリズムの広大な組織的活動と比較してみると、地上の政治はまるで子供の遊びのようなものと言わざるを得ません。本質的な内容においても、スケールにおいても、比べものにならないのです。



## スピリチュアリズムの普及にともなう地上の政治の自動的変化

ここ２００年の間に、霊界からの働きかけによって、地上人類の霊性はかなり向上してきました。そうした霊性の進化が物質世界に反映し、旧来の独裁的・非人間的な政治制度や社会制度が撤廃され、より摂理に適ったものへと改善されてきました。人種や家柄・階級による差別、男女の違いによる差別といった長い間の悪習慣が、少しずつ取り除かれるようになってきました。困った人に手を差し伸べ、社会全体で弱者の世話をするという社会福祉・互助の精神が、徐々に地上世界の制度に反映されるようになってきました。地球規模での利他愛のシステム・助け合いのシステムが、少しずつ確立しつつあるのです。

とは言っても、現時点における社会改革は、まだまだ表面的な次元にとどまっています。それは霊的真理が、人類の中に十分浸透・定着していないためです。何度も述べますが、地上世界のさまざまな問題を根本的に解決するには、霊的真理による「心の変革・価値観の転換」以外にはあり得ません。まさにスピリチュアリズムこそが、「霊的真理の普及」という最も効率の良い方法で地上の変革を推し進めているのです。

スピリチュアリズムによる霊的真理の普及にともない、人類全体の精神レベル・霊的レベルは確実にアップすることになります。何百年か後には、霊的真理に基づいて考え判断し、真理にそった生活を心がける人々が世界人口の半数以上を占めるようになるでしょう。その時には、政治も、経済も、法律も、教育も、社会制度も、すべてが真理に適ったものに変化しているはずです。それまでは霊的真理の普及とともに、あらゆる方面で徐々に霊的改革が進んでいくことになります。

> 霊的真理を理解する人が増えるにつれて、その知識にのっとった生き方をする人が増え、その人たちの生活が依存している各種の制度も、霊と精神と身体がその幸福と成長と成熟にとって必要な体験が得られるように改善されていくことでしょう。
>
> 〈シルバーバーチ１１・１７５〉

## 2 スピリチュアリストとしての政治との係わり ――私達は今、どのように政治と付き合うべきか

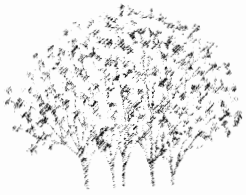
地上に霊的真理が広まり、人類共通の道徳・価値観となったときには、地上の政治・経済は、自動的に真理と一致したものになっていきます。政治は、地上人類の霊的進化に貢献するものへと変化していくことになるでしょう。しかし私達が生きている間に付き合うことになる地上の政治は、「物質主義」「利己主義」に支配された、きわめてエゴイズム性の強いものです。およそ霊的理想とは懸け離れた低次元の営みです。

私達スピリチュアリストは、そうした地上の政治と、どのように係わったらよいのでしょうか。

### 地上の政治を、小さなものとして見る

霊界から見れば、地上における政治的な立場の違い、主義・主張の違いなどは無きに等しいものです。霊界の高級霊達は、そうしたものに全く重要性を認めません。私達スピリチュアリストも、霊界の人々と同じような視点から、地上の政治を見ていかなければなりません。常に霊界の視点から眺めていくように心がけなければなりません。

霊的真理を知った者は、地上の政治的出来事に対して、超然とした姿勢で臨んでいればよいのです。そして何より大切なことは ――「スピリチュアリストは、一国の大統領や首相よりも、永遠的で価値のある仕事をしている」ということを、しっかりと自覚していることです。地上の政治に過大な期待を寄せるのは、霊的世界の存在を、いまだ信じられない人がすることです。



### 霊的摂理に一致した考えと行為に対してのみ評価を与える

このように言っても、地上の政治や政治家のすべてを、頭から無視するということではありません。真剣に人助けのために力を尽くしている政治家を、否定すべきではありません。私達はシルバーバーチにならって、地上の政治や政治家については、それが霊的摂理に一致しているとき、あるいは人類の霊的進化に貢献する要素があるときには評価するという姿勢を貫くことです。政治や政治家に対して、「霊的観点から見る」ということです。　政治家が本心から ――「持たざる人々のために一身を捧げているとき」「人類の霊的進化を妨げる、さまざまな障害を取り除こうと努力しているとき」「利他性と滅私の精神に貫かれ、人類の肉主霊従化に歯止めを掛け、霊的進化を促すような活動をしているとき」、私達はそれを貴重な利他的行為として評価すべきです。その人の行為が霊的な価値観に合っているならば、政治的な主義・主張・党派が何であれ、利他的な行為そのものを認め、価値を見い出してあげるべきなのです。

人の行いは、「利他愛の実践・無私の奉仕」の程度にともない本当の霊的価値を持つようになりますが、政治家に対しても、そうした観点から見ていくことが必要です。

### 常に地上世界の出来事を、「霊的進化」という観点から見る ――“経済破綻”は、時にはありがたいもの

私達スピリチュアリストは、政治に限らず地上世界のあらゆる出来事を、常に霊界からの視点・霊的観点から眺めるようにしなければなりません。霊的視点に立ったとき、地上において価値あるものとは ――「霊的進化に何らかのプラスとなるもの」ということになります。地上人類にとってきわめて重要に思われる出来事も、それが単に物質的な次元にとどまっているならば、全く価値はないということになります。政治的ないかなる改革も斬新な政策も、人類の霊的進化に寄与しない限り、真の価値を持ち得ないのです。

今、世界中の人々が最も関心を寄せ、その動向を注目しているのがアメリカ経済の行方です。もしアメリカ経済が下降するようなことになれば、現実に、世界恐慌が生じかねない状況に置かれています。それを世界中の人々は最も恐れています。実際に恐慌が起これば、多くの人々が苦境に立たされることになるでしょう。一生かけて築き上げてきた財産が、あっと言う間に失われたり、失業者が世界中の都市にあふれるようになるでしょう。

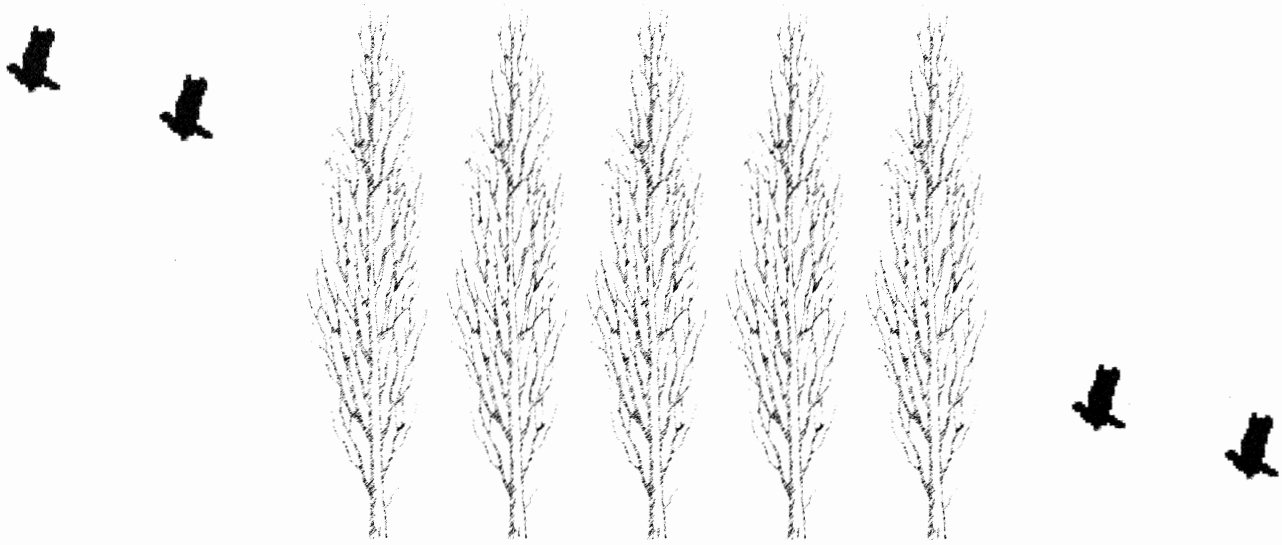
しかし、そうした世界経済の破綻は、霊界から見れば、さして重大なことではありません。それは、どこまでも物質次元の領域におけるパニックに過ぎません。昨日まで健康だと思っていた人が、突然ガンの宣告を受けたようなものです。「何とか生活できればよし」と心を定めた人、欲のない人にとっては、経済的な破綻はそれほどひどい打撃とはなりません。金銭欲に縛られている人、お金こそが一番大事だと思っている人にとってのみ、それは大きなショックとなるのです。お金よりもっと大切なものがあるという「霊的真理」の原則を実践している人には、経済的な後退は何の痛手にもなりません。

こうしたことを考えると、今後アメリカの不況に端を発した世界的な経済恐慌が現実に到来するようなことになったとしても、大袈裟に心配する必要はないということなのです。地上世界における経済問題は、その大半が、物質的・本能的欲望にかられた結果生じたものです。自ら神の摂理に反したために、自然の法則にそって苦しみを招来することなのです。自分でまいた種を、自分で刈り取るのは当たり前です。

経済破綻によって味わう痛みは、物欲追求に狂った地上人が、正常な状態に戻るために与えられる必要な苦しみです。経済破綻は、本当は地上人類にとって悪いことではありません。１９９０年、株価の暴落をきっかけにして日本はバブル経済の破綻を迎え、奈落の底に突き落とされることになりました。そして、いまだにその後遺症から立ち直れずに苦しんでいます。

しかし、もしこうしたショックがなかったならば、日本国民は、さらに「肉主霊従」の中にどっぷりつかり、本能的快楽に浸り続けたことでしょう。その意味で“バブル崩壊”は、日本にとって実にありがたいことだったのです。

> あなた方人間にとって大変な不幸に思えることが、霊的には大変な利益をもたらすことがあるのです。
>
> 〈シルバーバーチ８・１８〉



## 経済大国より、霊的リーダー国を目指すべき

もし今後、日本の経済が破綻をきたし、経済中流国に転落するような事態に至ったとしても、憂える必要はありません。霊的世界から見たとき、日本が経済大国であり続けなければならない理由などどこにもありません。経済大国であることは、特別優れたことでも、日本民族の霊性の高さを証明することでもないのです。日本は、アジアの片隅にある経済二流国で十分なのです。

その代わりに、日本が全力を挙げて向かうべき方向は「霊的先進国」なのです。国益追求を最優先する弱肉強食のエゴイズムの地球において、日本は世界に先駆けて、霊的摂理を実践する霊的大国、霊的摂理の順守を目標とする霊的リーダー国を目指さなければなりません。金儲けよりも質素に生き、他国への奉仕を国策の中心とするような国家であって欲しいと願います。

経済大国であろうとする目的は、すでに時代遅れとなりつつあります。それは、いつまでも権力志向を抜けられない中国やアメリカ、あるいは発展途上国に任せればいいことであって、日本は一歩先を目指していかなければなりません。我が国は、経済成長を第一に考えるような霊的に未熟なレベルを卒業しなければならない時期を迎えているのです。物から心へと、国民の意識が飛躍しなければならない時に至っているのです。

## 積極的な政治不参加も、スピリチュアリストとしての正しい在り方

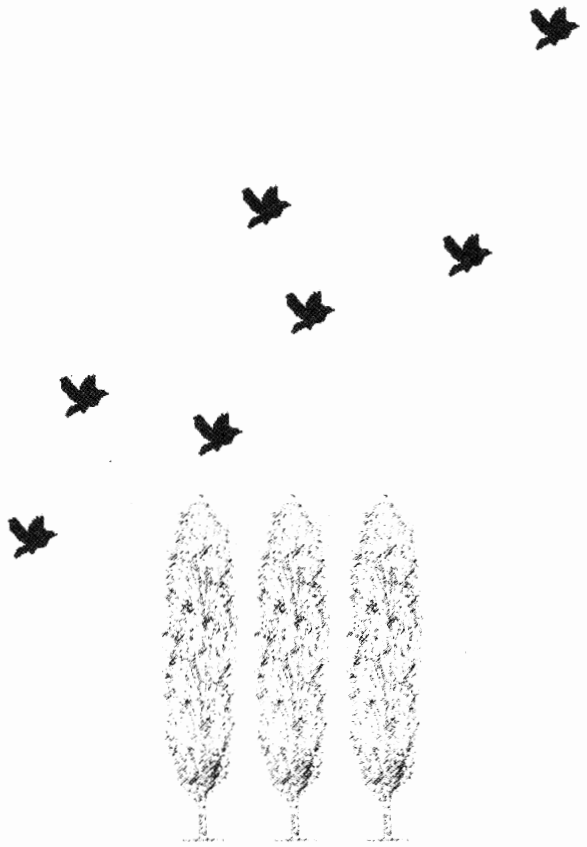
このように現代の政治に対する私達スピリチュアリストとしての見解が明確になったところで、最後に具体的に、どのように現実の政治と係わりを持つべきかを考えてみましょう。

私達スピリチュアリストが、欠陥だらけの地上の政治（民主主義）に期待を寄せたり、これを積極的に支持するような必要は全くありません。地上の政治と特別な係わりを持ったり、政治に参加する必要性はないのです。それどころか、民主主義という欠陥システムの上に立った現代の政治を批判する意味で、これと一線を画し、積極的な政治不参加の意思表示をしてもいいのです。

私達スピリチュアリストは、この世のいかなる政治家以上に、地上人の真の幸福のために働いています。もし私達が、「スピリチュアリズム」という全人類に対する貢献をなしていないならば、政治不参加の態度は、無責任のそしりを受けても仕方がないかも知れません。しかし私達は現実に、いかなる政治家にも優る人類への貢献をしているのです。それゆえ、この世の政治に対して一線を引いて臨む、明確な理由と資格があるということになります。はっきりと言えば、地上の政治には参加してもしなくてもどちらでもいい、ということなのです。

もちろん個人的に優れた精神と献身性を備えた政治家（＊例えば石原慎太郎氏のような）に対して、これを支持し援助することは間違ってはいません。それについては、各自が自分の良心に基づいて判断すればいいことです。しかし、地上の政治家に過大な期待を寄せることは慎まなければなりません。

私達スピリチュアリストは、常に「霊的視点」に立って、地上の政治を高みから見下ろしていなければならないのです。



## アメリカ同時テロ事件について

今回のテロ事件は、地上的な観点からすれば大事件ですが、地球人類の運命を変えてしまうようなことには決してなりません。これまでも世界中を震撼させ、人々を恐怖に陥れるような大事件は、たびたび発生しています。二度の世界大戦、冷戦中の核兵器開発競争、近いところでは中東湾岸戦争などがそうです。そして今回のテロ事件は、状況によってはさらなる報復戦争に発展し、日本もその中に巻き込まれる危険性もはらんでいます。

もし日本が最悪の事態に直面せざるを得なくなったとしても、スピリチュアリズムを知った私達は、動揺したり不安におののくようなことがあってはなりません。シルバーバーチは、いかなる危機的状況にあっても、常に楽観的な姿勢を取るように教えています。地上には、何ひとつ不安に思うようなことはないことを述べています。私達はどのような事態にあっても平静さと楽観性を持ち続け、心配の念を心に抱かないように努めなければなりません。霊的真理を知った者は、こういう時こそ、地上の事件を「霊的視点」から眺め、地上の興奮や感情に巻き込まれないようにすべきなのです。霊界の存在を知らない一般の人々と、同じような反応をしてはなりません。

今回のようなテロ事件も、結局は、地上人類が「霊的真理」を共通の指針としない限り、根本的に解決されることはありません。その意味で、私達スピリチュアリストが、一人でも時期のきた人に「霊的真理」を伝えることこそが、最も根本的な解決につながる道であることを、しっかりと自覚していなければなりません。“テロ”という暴力行為もそれに対する“武力報復”も、霊的に見たときには、ともに善しとされるものではありません。テロ・報復というそのいずれもが、「霊的真理」という絶対的な指針に基づかないところでの未熟な人間の行為に他ならないのです。

以上は、純粋な霊的観点に立ったテロ事件に対する見解です。ここでもう一歩踏み込んで、地上的観点から考えてみましょう。地上では常に、二つの善くない方法のうち、より善い方法を選択しなければならない事態に直面します。今回のテロ事件も、まさにその観点から見ていかなければなりません。

テロと武力報復では、どちらが「より悪い（エゴ性が強い）」のでしょうか。まず、先に暴力を引き起こしたテロ側に「悪質性の度合いが強い」と言わなければなりません。しかも自分達の主張のために、無差別な殺人をする、手段を選ばない殺人をするということは、最もエゴ的な行為であることは明白です。

一部のマスコミや学者は、イスラム世界での貧困が、こうしたテロを生み出す原因であり、貧困の問題を解決しないうちはテロは無くならないと言います。しかし、それは間違いです。貧しいから暴力に走るのではなく、間違った考え（思想）があるから暴力へと走るのです。暴力の第一原因は「貧困」という環境ではなく、「間違った心」にあるのです。

無差別テロは、エゴの極致です。テロによる被害を受けた側が報復に出ることは、“正当防衛”として認められます。さらに、それをきっかけにテロの一掃を図るということであれば、動機としては決して間違っていません。武力を用いるという点については問題があっても、エゴ性という点から見たとき、悪質さの程度はそれほど大きくないということです。“正当防衛とテロ撲滅”は、スピリチュアリズムの観点から見ても是認されるものです。今回のテロ事件は、「テロ」という極悪に対して、「武力報復」という小悪で対応するという構図で考えるべきです。

次に今回のテロ事件に対して、日本が取るべき姿勢について考えてみましょう。この問題はまず、何十人という日本人が一方的に殺されている、という事実から考えなければなりません。日本国家は、このテロ事件を、日本の“正当防衛”の問題ととらえなければなりません。その観点から、自分自身で立ち上がって、テロを引き起こした相手に抗議すべきなのです。それが国民の命を守るという、政府としての当たり前の義務なのです。アメリカの報復攻撃に協力するというのは、その後の話なのです。この肝心な点が認識されていないために、的外れの議論がなされています。

武力報復に反対する、それは確かにスピリチュアリズム的であり、正しい主張です。しかし、スピリチュアリズムという広大な思想的背景があってそれを主張するならよいのですが、今の時点で、単なる「暴力はいけない」というレベルで問題を論じるべきではありません。暴力はいけないと言っていても、すでに相手が暴力をふるってきているという現実があるのです。またこれから、いつ日本国家がテロで脅しを受けるかも知れないのです。

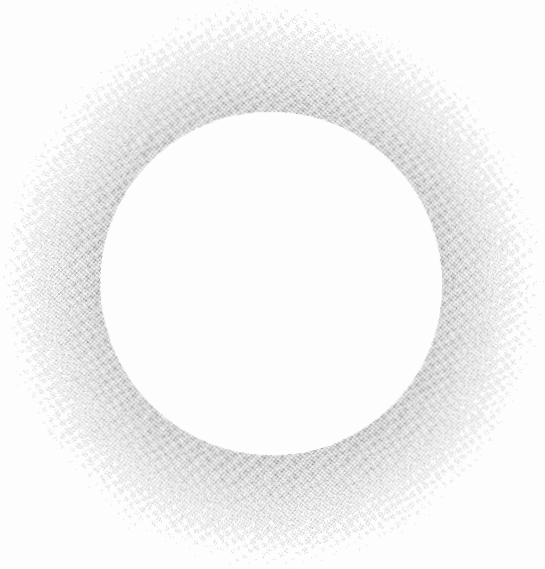
武力行使には悪の要素が付きまといますが、他国が犠牲を払い、血を流す陰で、「自分達だけは犠牲にならない」ということは、自己中心的でありエゴイズムとなってしまいます。「国が滅んでもやむなし」との決意がないところで、武力報復へは協力すべきではないと主張することは、必然的にエゴイズムと同じことになってしまいます。そうしたエゴ的国家を、どの国も信用しなくなるでしょうし、国家存亡の危機に直面しても助けてはくれないでしょう。

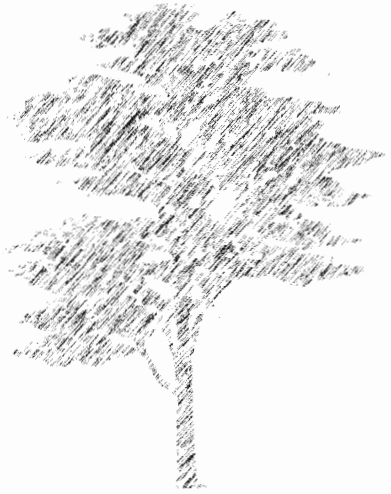
日本が具体的に、どのような態度を取るべきかの問題については、ニューズレターは結論を出す立場

にはありませんが、霊的観点からは低い次元であっても、武力を含めての協力関係の中で国家を存続させていくことが、当面の現実的な選択肢であるように思います。平和主義という薄っぺらなきれいごとを掲げることで、最も大切な他国との信頼関係、心と心のつながりを失うことになると思います。

しょせん人間が考え出したにすぎない規則（憲法）に縛られ、エゴ的平和主義・空想的平和主義に固執することは、国を滅びに至らせることになるでしょう。「平和憲法のこって国滅ぶ」という事態を迎えることにもなりかねません。利己主義の支配する惑星地球にあって、武力によって国を守ろうとすることは、必要悪なのです。武力という小悪によってしか平和が維持できないのが、悲しい地球の現実なのです。「小悪（軍事行動）」にこだわり、「善（国際協調・助け合い）」を捨て去るような愚を犯すべきではないと思います。

ここでは問題点を提起するにとどめ、後は、皆さん方それぞれの判断に任せることにします。スピリチュアリズムを信じる人々の中にあっても、いろいろな意見に分かれる問題だと思います。





# スピリチュアリズム・ビデオ&テープ ライブラリー

## VIDEO

### ビデオ『地球人類の霊性進化の道 “スピリチュアリズム”』

ー霊的真理のエッセンス・真理編ー

（価格）

「真理編・前編」２時間テープ　１本……２０００円

「真理編・後編」２時間テープ　２本……３５００円

※別途、送料がかかります。

当サークルでは、スピリチュアリズムによってもたらされた「霊的真理」を、より多くの方々に正確に理解していただくために、「真理編」のビデオを作成しました。このビデオは、膨大な真理を簡潔にまとめ、誰にでも分かりやすい言葉で説明しています。入門者にかぎらず、これまで長年「霊訓」に親しんでこられた方にとっても、驚くような新鮮さと、真理の深い理解にともなう感動を得ていただけるものと確信しています。またこのビデオは、「読書会・学習会」を進める上においても、最適の教材になるものと思います。

すでにビデオをご覧になった方々から、多くの感動と感謝の声が寄せられております。「今まで本で読み、分かっていたつもりだったけれど、このビデオによって初めて、スピリチュアリズムの一番肝心な点が明確になりました」という感想を、何人もの方々からいただいております。

本を読むのは大変だという方も、ビデオによる学習ならば、ポイントを押さえながら、一気に全体を通して学ぶことができます。スピリチュアリストにとって、「霊的真理」を理解することは最も大切なことですが、このビデオは、そのための大きな助けになるものと思います。

TAPE

## スピリチュアリズム関連書籍の「朗読テープ」

**「スピリチュアリズム入門」**９０分テープ　４本……**１６００円**

**「続スピリチュアリズム入門」**

９０分テープ　５本
６０分テープ　１本　＞計６本 **２５００円**

**「５００に及ぶあの世からの現地報告」**

９０分テープ　８本……**３０００円**

※別途、送料がかかります。

これまで数多くのスピリチュアリズム関係の書物を読まれたにもかかわらず、その本質を十分理解できないままの方々が大勢いらっしゃいます。そのような方が、当サークル出版の『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』を読まれ ――「初めてスピリチュアリズムの素晴らしさが分かりました。霊的真理のアウトラインが理解できました」と、感想を述べてくださっています。

そうした方々の中から、ぜひこれらの本をテープにしてほしいとの要望が寄せられておりましたが、この度、サークルのメンバーによって、『スピリチュアリズム入門』『続スピリチュアリズム入門』『５００に及ぶあの世からの現地報告』の３冊の朗読テープが完成しました。

早速テープを聴かれた方々から ――「真理が心に沁みわたり、深い霊的世界に包まれるような体験をしました」「一緒に霊的サークルに参加しているようで、落ち込んでいた心が引き上げられました」といった感想をいただきました。また、「サークルの学習会でこのテープを聴くことによって、全員が霊的啓発を受け、霊的な感動にひたることができました」とおっしゃる方もみえました。

皆さん一様に、本ではなかなか得られない霊的雰囲気を、この朗読テープを通じて身近に体験されるようです。予想を超えた反応に、私達も驚き嬉しく思っています。皆さんがこのテープによって、霊的真理の正確な理解とともに、深い霊的世界にふれ、心を高めてくださることを願っています。

（※なおこのテープは、自由にダビングしていただいて差し支えありません。）

# ≋ スピリチュアリズム・ライブラリー ≋

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

**◆スピリチュアリズム入門** (169頁)
－スピリチュアリズムが明かす－「心霊現象のメカニズム＆すばらしい死後の世界」

**◆続スピリチュアリズム入門** (256頁)
－高級霊訓が明かす－「霊的真理のエッセンス＆霊的成長の道」

**◆スピリチュアリズムの真髄**「現象編」(297頁)
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

**◆スピリチュアリズムの真髄**「思想編」(357頁)
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

**◆500に及ぶあの世からの現地報告** (437頁)
－エクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活－
『Life After Death』 ネヴィレ・ランダル著／小池 英 訳

**◆マイヤースの通信－永遠の大道**（全訳）(271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

**◆マイヤースの通信－個人的存在の彼方**（全訳） (304頁)
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

**◆霊訓**（完訳・上）『The Spirit Teachings』 (225頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

**◆霊訓**（完訳・下） 『The Spirit Teachings』 (260頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

**◆シルバーバーチは語る** (443頁)
『Teachings of Silver Birch』A. W. オースティン編／近藤千雄 訳

**◆シルバーバーチの霊訓**
－スピリチュアリズムによる霊性進化の道しるべ－
『A Voice in the Wilderness』 トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

**〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉**

**◆シルバーバーチの霊訓**（仮題）『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

**◆シルバーバーチの霊訓**（仮題）『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

**◆ジャック・ウェバーの霊現象** 『The Mediumship of Jack Webber』
ハリー・エドワーズ著／近藤千雄 訳

**◆妖精物語** 『The Loming of the Fairies』
A・コナン・ドイル著／近藤千雄 訳

## “スピリチュアリズム・ニューズレター”について

このニューズレターは、「真摯にスピリチュアリズムを学びたい、実践したい」という方々のお役に立つことを願い、発行いたしております。創刊以来、すでに１５号を数え、その間、全国各地の多くの皆様から感想や励ましのお言葉をいただき、ありがとうございます。メンバー一同、少しでもスピリチュアリズム普及のために貢献できますことを、心から嬉しく思っています。

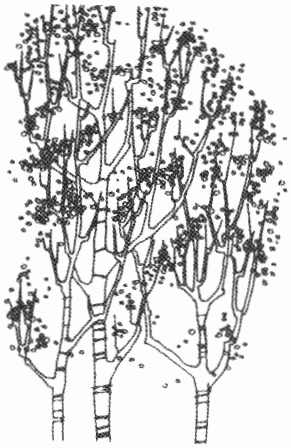
先回（１４号）でお知らせいたしましたが、初めてこのニューズレターを希望される皆様へは、まず創刊号～５号までをお送りいたしております。（ご依頼のあったお知り合いの方へも、同様にいたしております。）

６号以降のニューズレターにつきましては、ホームページで主要な内容はほとんど公開しておりますので、それをご覧になってください。

ただし当サークル出版の書籍やテープをお求めいただいた方で、ご希望があれば、６号以降の分につきましても差し上げます。また今後の発行分も継続してお送りいたします。（すべて無料です。）

なお皆様からのご依頼でお送りしていた方々のうち、これまで一度も書籍のご注文のない方へは、今回から送付を中止させていただきました。しかし、なかには皆様を通じて購入してくださった方もいらっしゃることと思います。その場合には、ニューズレターをお送りいたしますのでお知らせください。

すべて少人数で、スピリチュアリズム普及の奉仕のために行っておりますので、上記のような方針に改めましたことをご理解ください。また発送については、できるかぎり注意を払っておりますが、手違いが生じる場合もあります。何かご不明な点がありましたら、遠慮なくお問い合わせください。



*Spiritualism Circle*

## *Kokoro no Dojo*